西遊記新話

三藏法師と孫悟空

世界おとぎ文庫

17

1

世界おとぎ文庫

(17)

三藏法師と孫悟空

楠山正雄編著

小峰書店刊

紅孩兒（こうがいじ）—赤ン坊小僧の火の車

（三二六頁参照）

鴨下晁湖筆

国立国会
25.1121
図書館

218245

晁湖

te923.Ku956s

序話（中國の童話と西遊記）

I

中國には、ふるく、童謠ということばはあつても、童話ということばはありませんでした。日本で、童話ということばの新しいよりも、もつとそれは中國では新しいので、日本近年の童話文学運動によつて輸入された新語でした。

それよりも、中國には、ごくふるくから、小説ということばがあつて、これが、いまいうメールヒェン――童話、おとぎ話にあたります。小説ということばも、西洋のノヴェルやロマン、コントまでもいつしょにしていうことばになつてから、はてしもなくひろい、とみいったいみをもつようになりましたが、ほんらいの中國語では、ちょっとかわつた世間話、うわさの種になるようなおもしろい話、というくらいのいみで、それはそつくり、メールヒェン（ちいさな世間話）にあてはまるものでした。つまりひろいいみの民話なので、その農民や木こりたちのむじゃきに話しあうことばを書きとめて、政治の参考にしたり、歴史の材料にしたりする役人がいて、これを稗官といい、そのかいたものを、稗史といったのです。稗というのはひえあわ

または小米のことですから、朝廷で王様や大臣のかかせる正史にくらべると、稗官の稗史――小説は、とりとめないお話の掃きよせのようなものでした。稗官でなくても、世間がひろく、物をかくことが好きで、耳にとまったことなにくれと、ずいひつのようにかきとめる人もおおく、むつかしい政治や歴史のことばかりかく学者たちとべつに、このひとたちを小説家ともいったのです。

ですから、小説家とひとくちにいっても、その中にはりっぱな学者がいて、歴史家のように世の中の実事をそのとおりかきのこし、いろんな本や記録の中から、あれこれと目にとまったことをかきとめたり、西洋でいうエッセイ、日本で随筆とか鈔、聞書といったようなものも、小説にふくまれるようになりましたが、いちばんおおいのは、やはりかわっためずらしい世間話、中でも、志怪――人間界を超えた深秘怪異の事をしるしたもので、おもしろくもあり、変化もあるので、さかんにつたえられもし、よまれもして、これがまず小説の本体に立てられ、中國の神話、傳説、童話は、この小説によって傳わりました。むろん、そのなかには、たれが作者ともなく、民たちの中に、しぜんとできて、語りひろめられた民話もおおいのですが、のちには、神廟に仕える神主、巫子のような人たちが、神の威霊をあらたかにするためつくった話、老子の教を本にして、仙人の修行をして、お呪や法術をしてみせる道士とか、方士とかいうなかまが、道をひろめるために考えだした、さまざまふしぎな話、それと、のちには、佛教の

坊さんたちが、死んでのちのあの世への信心をおこさせるため説ききかせた、地獄極楽の話、そんなものがごったになって、あとからあとからと、小説ができました。おかげで、純粋に、古代の民たちの、空想の中から生まれたらしい神話や傳説も、たいてい、小説の中にうずもれてしまって、小説家の手で、あれこれと尾ひれがそえられたので、あれほどふるい國でいながら、中國には、ギリシァや、インドまたはエジプトのように、そしきだった神話というものがありません。これはひとつには、國がひろくて、黄河をはさむ北方と、揚子江を抱く南方とでは、祭る神や魔もちがえば、これにからむ言い傳えもちがいます、ことに、北方では、孔子の説いた政治と道德の教――儒教がさかんで、人間以上のことは民をまどわす、ひとくちに、怪力乱神としてしりぞけ、そういうことをかいた本は、やぶりすてられてしまったので、よけいにつたわらなくなったのだといいます。

それでも、とぼしいながらのこった中國の神話のことは、この文庫のべつの巻で、東方の神話をあつめるときにくわしく話しましょう。

II

そこで、つまりいうと、中國の小説というのは、すこしばかりつたわった古代の神話をどだ

いに、中國の、それも南の方におおく、それぞれの地方で民たちにまつられる善神、魔神の信仰にちなむ傳説がからんだものに、代だいの巫子、道士、好事の学者というような人たちが、それからそれと、入りくんだべつの筋をつけくわえたり、まったくあたらしいお話を、つくりそえたりして、だんだん大きなくみ立てをもつ、近代風の小説にまで成長したもので、したがつて、構成も、題材も、内容も、くらべものにならないほど、にぎやかで手のこんだものになりましたが、ただはじめの、人間ばなれした童話風、むつかしくいうとロマン風、幻想風という、もとからの特色は、世間の風俗、実事をあつかった写実の小説にものこっていました。

まして、はじめから自由自在な幻想をかきまくった志怪小説に、中國の小説の、そういう特色のいちばんはっきり出ていることは、いうまでもありません。そして、その類のなかの王様がここにあたらしく再話する西遊記――三藏法師と孫悟空の物語です。

西遊記は、いわば、傳説、神話、童話の断篇のような、なん百千としれない代だいの小説の上に立って、その精分を吸い上げてつくった一篇の大童話小説でございます。西遊記一部をよくよめば、ほぼ中國童話のぜんたいの味わいがわかります。そこで、まだよくあつめられ、せいりされていない童話集のかわりに、西遊記新話を、中國古譚集ないし童話集としてよんでもらうことにしました。

さて、西遊記が、いまの形にでき上がったのは、たぶん、十六世紀のなかばということです

が、それまでには、ずいぶんながい小説の歴史があります。

ほうらいの島とか、仙人の術とか、不老長生の霊薬などというかんがえは、中國に、とてもふるくからありました。そして、それとからみあった童話ふうの幻想も、きれぎれにのこっています。もっとまとまってかかれた本があったのでしょうが、それがのこらないのは、戰火や水害や、その上に秦の始皇帝が、わざわざ本をあつめて、焚きほろぼしたりしたりしたためでしょう。いまそういう本でのこっているのは、西漢の末、東漢の世にかけてで、西暦の前二世紀から、西暦後二、三世紀までのものでした。

山海経という本があります。半分神話ふうに、古代の地理をしるしたものですが、そのなかに、とんろん（崑崙）の丘は、天の帝が、下界にくだったときの都だとかいてあります。とんろんの名は、いま、中國の西北をめぐる第一の大山脈の名にのこっていますが、古代のシナ人はこの山が世界のまん中をつらぬく柱と、かんがえたのでしょう。また、とんろんの丘にちかい玉山には、西王母といって、豹の尾をして、虎の歯をした、けものとも、魔とも、人間ともつかない女怪が居て、おどろにふりみだした髪の上に、かんむりをいただき、おお声でほえたけり、三羽の青い鳥が、そばに仕えていて、たべものをはこんでいる、ともかいています。

ところがまた、山海経より、そうふるくなくできたとおもわれている、穆天子傳という本があります。ふるいふるい古代の周の世の穆王という天子が、八頭の駿馬にのって、世界をめぐ

りあるき、こんろん山で、西王母と出あつて歓待され、瑤池（玉の池）という所で、さかんな宴会をしたと、その本はしるしています。こんろんというのは、もと黄河の上流をさかのぼつた、中央アジアのどこかの地名だつたのですが、これからのち、地上の樂園――パラダイスのようにあつかわれ、女怪のような西王母は、このお伽の花園の美しい女主人公になり、仙人の桃の木をそだてる仙女の女王になりました。その蟠桃――大きな仙人の桃の実は、三千年にいちどなる、不老不死の藥だといわれ、王母は瑤池に蟠桃大会をひらいて、天帝や仙人の王様の太上老君（老子）、そのほかをよんでごちそうすることもあり、みずから仙桃をたずさえて、漢の武帝をたずねて、仙人の道を語りあつたという小説小説もあります。（漢武故事、漢武内傳）

こうなると、こんろん山は、西洋童話のフェアリランド（妖精妖女の國）で、西王母はフェアリ・クィン（妖仙女王）ということになります。これがまず、中國童話小説のおお本で、これから、西王母の仙藥をぬすんで、月の都にはしつた嫦娥（兎姫）ができ、太陽の黒点を三本足の烏に見立てたのも、西王母の三青鳥にかんけいがある、という人もあります。

西遊記は、こんろん山や西王母の物語をはじめこのほかたくさんある古代の神話、傳説をどだいにして、そののちつづいてあらわれた鬼神（人間がそのまま精霊になるもの）、や妖魔（人間でない、鳥けものそのほかの通力を得たもの）、佛教の坊さんのいう地獄極樂、やはり、お経といつしょにはいつて來た龍王龍女、海の底の宮殿の龍宮など、なにくれと、とりこんで、天

と空と地、と地の下、海の底の世界まで舞台にした大童話小説をつくりあげたのです。そして、それまでにくるのに、十五六世紀のながい年月が立つているのです。

前にも話したとおり、中國の小説が、山海経や穆天子傳のできた漢の世から、三國のひとつの魏、晉、六朝とつづいて（西暦三―八世紀）、唐の世（七―九世紀）一代には、りつぱな文学者や詩人が、すすんで小説をかいたので、内容もゆたかになり、たとえば楊貴妃一代のことを、事実にちかくかいた傳記ふうの小説もでき（長恨歌傳）、わが宮本武藏とか岩見重太郎とかいつた、剣客の武侠小説（虬髯客傳）、男女のあいだのやさしい人情をうつした世話物小説（鶯鶯傳）もあらわれましたが、やはり、童話ふうの特色は、どこまでも、もちつたえていて、蟻の王國のおとぎ話をかいた、南柯太守傳とか、かんたん夢の枕の話の枕中記とか、いまでは、たれでも知つている杜子春傳とか、名だかいものは、やはりこの方におおいのです。

さて、これだけになつても、唐の世一代は、小説とはいつても、まだ本來の随筆ふう、エッセイふうをぬけきらず、かんたんな内容を、飾りのおおいことばでのべた叙事文のようなものでした。それが、次の時代の宋の世（西暦十―十三世紀）になつて、少しずつほぐれて來ました。古風な文章体でかかれて來た小説が、いまいう白話体――口語文体と行かないまでも、自由に口語をまぜた諢詞小説（俗語小説）に、だんだんちかくなつて來たのです。なかにはさむ詩も五言、七言の律とか、絶句とかのやかましいものでなく、詞といつて、句法も押韻も自由な、

散文詩か歌謠のようなものが用いられることになりました。ひとりへやの中で読んで、いいとか、わるいとかいっていた小説が、大勢のきき手を前に話される、お話になったのです。それは、じっさいに、説話人――講談師の話したものなので、それをかきとめて本にまとめたものを、話本といいました。

つぎの元、明の世（十三―十六世紀）になると、街の大道講釈がさかんになり、小説も半分講談師の種本につかわれるようになりましたが、それがのちになるほど、文学者の手によって文章がととのえられ、これまでにない構想もくわえられて、りっぱに近代文学のなかま入りのできる、あたらしい小説の一体ができることになったのです。

それでも、唐代の文語小説できまったかたちは、元、明時代の口語小説になってもくずれず、一、史傳ふう、二、武俠もの、三、人情もの、そして、四、童話ふうのものと四つに分かれ、それがまた一、三國志、二、水滸傳、三、金瓶梅、四、西遊記――と、四つに分かれて、それぞれに大作の小説をのこし、四大奇書とよばれて、もてはやされました。ただし、このうち、（三）の金瓶梅は、すこしのちの、清朝時代出た、紅楼夢ととりかえた方がいいかもしれません。

まず、これまでが、西遊記のあらわれる前の、ごくざっとした中國小説の歴史です。

Ⅲ

さて、あらためていうまでもなく「西遊記」は、いまからおよそ千三百年前、西暦の七世紀に、（経、律、論、三藏のお経のすべてにあかるいので、三藏法師とよばれた）大唐の名僧玄奘（西暦六〇六―六六四）が、十七年ものながい苦しい旅ののち、はるばる、西方の國天竺（インド）にたどり着いて、しゅびよく六百五十七部のお経をとってかえったという、名だかい事実をもとに、玄奘をたすける、孫悟空、猪八戒、沙悟淨ら三人の、妖怪とも人間ともつかない奇妙なお弟子たちを出し、とりわけ、天地の間の霊妙な氣をうけて、石のたまごから生まれたという、神猿孫悟空の神変ふしぎなはたらきで、行く先ざきの妖魔悪鬼を平らげ、「八十一難」もの大ぼうけんを、みごとにのりこえる物語でございます。前にもいったとおり、「西遊記」、「水滸傳」、「三國志」、「金瓶梅」とならべて、中國小説の四大奇書、とむかしからいっていますが、「千一夜物語」（アラビヤンナイツ）を世界最大の奇書といういみでいうなら、西遊記は「千一夜物語」とならんで、まさるともおとらない、世界の二大奇書といってもよろしいのです。それに、「千一夜物語」が、ながい年月の間、いろいろの人の手にかかった、れんらくのないお話のよせあつめであるのとちがって、西遊記は全篇一百回という、ながいひとつづきの物語

である上、おなじ自由自在な空想を語るにしても、それはあくまで、わたしたちに親しみの多い東洋の佛や仙人の世界のことですし、それに、「千一夜物語」の残忍がない代り、この方には、かえってとぼけた滑稽が、たびたびひとをわらわせます。宗教や学問の寓意をこめたたとえ話としてみても、そこにかなり手のこんだ工夫があって、「神曲」とか、「神仙女王」とか、そのほか、その方で名だかい西洋文学の名作にくらべることもできるでしょう。

「西遊記」の作者は、よく分かりません。元の代に長春眞人邱処機という道士があって、元の太祖（成吉思汗）の西征の陣中へよばれて行って、西域（中央アジア）に一万五千里の長旅を、四年かかってした事があり、その旅行記が弟子の李志常のかいた、「長春眞人西遊記」という本で傳わっているので、小説の「西遊記」も、それといっしょにされていたこともありました。しかし、いまでは、吳承恩が、小説の方の作者ということになっています。江蘇省山陽の生まれで、字を汝忠、号を射陽山人といい、明の世のはじめ、嘉靖・万暦の間（一五一〇？―一五八〇？）の人でありました。でも、この「西遊記」の出る前、宋から元の世にかけて、「大唐三藏取経詩話」という物語、「唐三藏西天取経」という芝居、それに「西遊記傳」という、それこそ「西遊記」の、そつくり下書のような小説まであって、（じつは「記傳」の方が、いまの「西遊記」よりあとから出た、まずい再話だという人もあります）太宗皇帝の地獄めぐりから、三藏法師の厄難のかずかず、悟空も八戒も沙僧も、それぞれ早くから登場して、活躍していて、いまの「西遊記」のかたちは、あら方出來上がって

いたのです。吳承恩はしかし、そういう古い材料をつかまえて、その上に自分の創意と勉強とで、いろいろとおもしろい筋立と場面をつくりそえ、何倍もの大きさの、すばらしい物語にまとめ上げ、生まれつきもっている滑稽の才でやわらげ、それを（もともと詩や文を上手にかく人でしたから）、かなりりっぱな美しい名文に書きあらわしてみせました。（魯迅の中國小説史略には、西遊記より前の四遊記、というものをあげています。その中の東遊記――上元八仙傳には、西王母の蟠桃会や観音、龍王があらわれ、南遊記の華光天王傳は、天上から地獄を舞台にして、齊天大聖があばれます、北遊記の北方眞武玄天上帝傳では、「西遊記」にもたびたび出る、天の北極を司どる眞武君というものの來歴がわかります。さいごの西遊記傳については、まえにいったとおりで、「西遊記」よりあとの本らしく、とり立てていうがものはないでしょう）。吳承恩の「西遊記」のあらわれたのちでも、「後西遊記」だの、「続西遊記」だの、「西遊補」だの、つづいていくつかの新しい「西遊記」が書かれましたが、もう二度と、吳承恩の「西遊記」だけのものができずにしまったのをみても、やはり四大奇書のひとつにもてはやされることはあったのです。

さいごに、シナ、ゴビ沙漠、中央アジアの國國からインドまで、東大陸のほとんどを舞台にして、すくなくとも、りんかくだけでは、世界文学にそう類例のない雄大な構想を、「西遊記」はいったい、どこから得てきたものでしょうか。玄奘みずからも、「大唐西域記」という本に

したしく遍歴した諸國の地理風俗をかきのこした上、「大慈恩寺三藏法師傳」をはじめ玄奘の西域探檢のてんまつが、いろいろの人の手でしるされるうち、話をおもしろくするための、深秘怪奇なこしらえ事も多くなり、それらがつみかさなって、いつか経文とりの神話のようなものにまでなりました。そういう、もやもやとした小説のたまごの中から、孫悟空もとびだし、八十一難の妖魔物語もはぐくまれて來たわけですが、胡適氏の「西遊記考証」には、インドのふるい叙事詩「ラーマヤーナ」のなかで活躍する猿王ハヌマンこそ、わが美猴王、齊天大聖の本身であると説いています。このほか、あれこれと読みちらしたであろう佛教、道教の寓言、訓話、傳説のきれぎれな記憶が、作者の幻想をたすけたことはいうまでもありません。

そして、そのなかには、巫子、道士、坊さんたちが、教をひろめる方便につくりだした妄誕奇怪な話のほかに、いっそう純粋な民話童話もふくまれていて、童話小説「西遊記」は、つまり、それらをあつめて、ふるいにかけたものを材料にして、あとは作者のちえでくみ立てられたといってよいでしょう。

Ⅳ

西遊記は、明代、世に出ると、さかんによまれたようですが、清朝になると、山陰悟一子の

「西遊眞詮」をはじめ、「原旨」「正旨」「証道書」「評注」など、評釈や注解の本が、あとからあとから出て、これに、李卓吾校本というのや、民國になって亞東図書館からの、胡適氏の考証を巻首にのせた、新訓点の活字本まで加えると、かなりちがった本があるわけですが、どれも、一百回でおわっていて、本文にもそうたいした出入はないようです。七十回本から百二十回本とある紅楼夢が、本がちがえば、本文もひどいぬきさしのあるのとはちがって、どの本でもほぼおなじなのはいいのですが、その代り、いったい、この本は、どういういみで、かかれたものだろうか——寓意や比喩のせんさく立てがたいへんで、儒者は、仁義八行にひきつける、坊さんは、禪学の理くつにあわせようとする、道士は、仙人の法術の方へもって行くというふうで、めんどうな本になりかけましたが、今日では、もっぱら文学上の動機からかかれた、童話小説の世界的傑作ということになりました。でも、作者は、ただ、おもしろいお話をかいたというだけでなく、やはりいくらか寓意のようなものがあって、三藏法師のお経文とりという題目をつかまえて、三藏のいちずに打ちこんだ人間のこころが、これをさまたげる、さまざまの邪魔と危險と誘惑に出あって、これにうち勝とうとしますが、ややもすると、負けそうになる、そのよわく、もろい、またはがんこでいじわるい心を悟空、八戒、悟淨三人の弟子が分けてもっているというのでしょう。悟空の靈智、八戒の情欲、悟淨のかた意地、それは、みんな三藏の内にもっているものなので、三藏の心が知

性の方へはたらけば、悟空の活動になり、情性の方におぼれれば、八戒がいばりだすということになります。そして、三蔵その人は、のちになるほど、お経文とりと、ほとけおがみと、殺生をやかましくいうほかは、ばかかとおもうほど単純で、臆病で、いくじなしで、こどものように、がまんよわく、ひもじがるというふうです。なにもかも、悟空まかせというところは、北國落の義経の「弁慶よしなに計らい候え」のなかまのようです。

西遊記のおもしろいのは、大げさで、そのくせ、あくまで童話ふうな活劇と、冒険の物語にあるばかりでなく、作者が、師弟あわせて四人のすくない人物を、それぞれ、かなりはっきりした性格にしたがって、はたらかせてある、上手な芝居作者のようなうで前にもあるのです。それと、たれもいうように、この作者だけのもつ自然なユーモア――おかしみとあそびで、四人の人物はもちろん妖怪変化までに、どこか、とぼけた人間味があって、たのしくよませます。

西遊記は、もともと講釈の種本から出てきたので、地の文と対話とそれに、あいだにはさんだ、その場、その場の情景を、飾りのおおいことばでよみ上げた詞と、この三つから成り立っています。わが義太夫節でいえば、地とコトバとサワリのようなものですが、それよりも、いっそう、浪花節のカタリとタンカとフシに、似ているかもしれません。ですから、これをそのまま、原作のあつらえどおりにほんやくすることは、なかなかむつかしいしごとです。（西洋中世にはやった半分韻文の語りものにも似ています。）西遊記の邦訳は、江戸時代の中頃（宝暦）

出來た「通俗西遊記」、末にちかく（文化）出た「絵本西遊記」から、明治大正年代にも、おとな用、こども用といろいろありますが、どれも筋がきにすこし色をつけた、再話本ばかりです。

わたくしの「新話」は、できるだけやさしいことばで、原作の地の文と、対話のイキだけもつたえようとこころみたものですが、なにぶん一百回、活字本にして二千ページもあるものをおとぎ文庫一冊におさめようがないので、はじめのふたつの部分――孫悟空と三蔵法師のおいたち物語にあたる十二回だけを、ほぼ原作にちかく、あとの十三回から一百回にわたる八十一難の物語は、金角銀角の物語、通天河の物語、火焔山の物語など二三箇所だけを、大うつしのようにして、あとは筋がきにとどめました。

そこで、ついでながら、作者のいう八十一難――八十一の冒険とは、どんなことかと、なかには、むりに「難」をそろえたようなところもありますが、ひととおりかいておきましょう。

八十一難は、三蔵の玄奘が、水の上からひろわれて、江流兒とよばれた昔にさかのぼっています。

第一　あぶない玄奘の胎生、疑いぶかい悪人に見はられる。

第二　若い母、生まれた赤子のしまつにこまる。

第三　満月の夜川へながされる。

第四　玄奘親をたずね、父の仇をうつ。
第五　西天の旅の第一日、妖虎の洞におちる。
第六　山賊の陥穴におちいる。
第七　雙叉嶺で猛獣にあう。
第八　両界山。孫悟空をすくいだす。
第九　鷹わたらずの谷で馬を取られる。
第十　観音院の火事。
第十一　金の袈裟を黒風山の妖怪にとられる。
第十二　猪八戒を降す。
第十三　黄風大王の妖風になやまされる。
第十四　霊吉菩薩の助けをかりて、妖魔を平らげる。
第十五　流沙河を渡りなやむ。
第十六　沙悟浄を弟子におさめる。
第十七　四人の菩薩、美女にばけて三蔵らをためす。
第十八　五荘観の人参果をぬすみくう。
第十九　観音の助けを借りて倒した人参の木を生かす。
第二十　死人にばける魔ものをたいじて、悟空、三蔵から破門される。

第二十一　黒松林の魔黄袍怪、三蔵をとる。
第二十二　魔にとられた宝蔵國の姫君の手紙をとどける。
第二十三　三蔵妖怪のために、虎にかえられる。
第二十四　守護の天神、平頂山の妖怪のことを警告する。
第二十五　蓮花洞の金角、銀角ふたりの大王と人をもりこむふくべ。
第二十六　烏鶏國の國王と太子、魔にころされた國王をよみがえらす。
第二十七　ふたり三蔵、ひとりは妖魔（文殊菩薩の青毛獅子）
第二十八　木の上につるされたこども魔もの。
第二十九　魔風、三蔵をさらう。
第三十　紅孩兒の火の車、悟空の大火難。
第三十一　観音菩薩、劍の蓮台で紅孩兒をくだす。
第三十二　黒水河の怪龍。
第三十三　悟空、車遅國の僧五百人を苦役からすくう。
第三十四　三人の妖道士と悟空の術くらべ。
第三十五　妖道士の正体わかり、車遅國王佛道にかえる。
第三十六　鳥の毛ひとつとばぬ通天河。
第三十七　通天河の妖怪、三蔵を川底へ引きこむ。

第三十八　魚籃観音のいわれ。
第三十九　金兜山の独角大王。
第四十　天神総がかり、独角の魔の輪に、のこらず武器を奪われる。悟空、如意棒をとられ空手になる。
第四十一　釈迦如來にたずねて、ようやく妖怪の正体をおさえる。
第四十二　男もはらむ、女護の國の妖水。
第四十三　西梁女國に三藏引きとめらる。
第四十四　琵琶洞のさそり女怪、三藏を苦しめる。
第四十五　悟空、山賊をころし、また三藏に追われる。
第四十六　天神総出の場で、二人悟空の大格闘。
第四十七　火焔山八百里の猛火。
第四十八　悟空、芭蕉扇のにせものをつかませられる。
第四十九　牛魔王と孫悟空の大いくさ、天地界をうならす。
第五十　祭賽國の怪しい血の塔。
第五十一　龍の盗んだ宝を取りかえす。
第五十二　三藏、木仙庵の怪老人らと詩を作る。
第五十三　妖怪、にせ雷音寺をつくり、三藏らを鐘の中に吸いこむ。

第五十四　彌勒菩薩にたのんで、にせ雷音寺の難をのがれる。
第五十五　くされ柿の木山のうわばみ。
第五十六　朱紫國で悟空にせ医者になる。
第五十七　國王の病なおる。
第五十八　妖怪の手から皇后を取りもどす。
第五十九　はだかの女蜘蛛の精、八戒をまどわす。
第六十　百目の、妖道士（むかでの精）の毒茶にあてられる。
第六十一　獅駝嶺の三妖魔。
第六十二　三人妖魔、悟空に苦しめられ、いったんわぼくしてまたそむく。
第六十三　三藏師弟、三妖魔の町の大難。
第六十四　釈迦如來、文殊普賢二菩薩、三妖魔をおさえる。（金の鷲、獅子と象）
第六十五　比丘國。こどもの生肝とりをすくう。
第六十六　國王をたぶらかしていた妖仙人（鹿）と妖妃（狐）たいじられる。
第六十七　松林の中で救った怪女とともに、ラマ僧の寺にとまる。
第六十八　三藏病み、寺の小坊主とられる。片足くつをのこしてにげる怪女。
第六十九　底なし穴の怪女、じつは李天王の養女、三藏をさらう。
第七十　滅法國王、一万人の僧をころす誓。悟空逆に、國王・王妃らのこらずの髪を剃る。

第七十一　隱霧山の怪物、豹の精、花びらを分ける術で師弟をはなし、いったん三藏をとらえ、悟空にたいじられる。
第七十二　天竺の入口、鳳仙郡。悟空雨をふらせる。
第七十三　天竺國王華縣。三人の王子、悟空らの武器を借り、怪物のためにもち去られる。
第七十四　豹頭山の妖怪から武器をとりもどす。
第七十五　竹節山の金毛九尾の獅子の精、しかえしに、玉華縣を荒らす。主人太乙星におさえられる。
第七十六　天竺國金平府、正月十五日の燈火祭に油をぬすむ青龍山玄英洞の妖怪、ついでに三藏をさらう。
第七十七　妖怪じつは犀牛のばけもの、たいじられる。
第七十八　天竺國の王女じつは月の兎、三藏を婿にとろうとして、正体をあらわす。
第七十九　金持で慈善家の寇員外の款待。員外强盗におそわれ、三藏ら無実の罪。
第八十　凌雲渡で三藏の人間の肉体水にながされる。
第八十一　天竺から東天へのかえり路。再び通天河。経文を水にひたされ、あらしの一夜。

八十一難というなかでも、火焔山の牛魔王たいじが、舞台の大きいのと、変化のおおいのとで、その中での山ですが、金兜山の独角大王の金剛琢（魔の輪）と、二人悟空（六耳獼猴と孫悟空）の爭いは、いずれも天神地神総出のにぎやかな劍戟レヴィウなので、火焔山につぐおも

しろい場面に、そういありません。けれど、あとのは、そのどちらも、第一部孫悟空の物語の天宮騷動のむし返しです。やはり、天宮騷動と火焔山とが、西遊記ぜんたいを通じて、作者の童話的空想の、いちばん大きなもり上がりでした。

西遊記の作者は、釈迦も孔子も老子もおなじなかまに入れて、佛教と儒教と道教を三教の会同の形で、自由に扱っていますが、中心はやはり、道士たちや民間の俗信のつたえる道家の傳説です。主人公の玄奘三藏についても、ほんとうは、出立のとき、唐の太宗の御弟聖僧などのさたではなく、あのころ唐の建國がまだ新しく、國境が不安な時で、外國へ出ることが禁じられていましたから、玄奘はいのちがけで、関所破りのようなことをして出たのです。もっともの ちに、西域の伊吾の高昌國で、玄奘は國王から、たいへんな歓待をうけ、それからは高昌國王の御弟と名のって、便宜をうけた事実はあるようです。ただし、太宗冥府行きの物語は、唐にふるくからある傳説を、作者がそのまま用いたものでしょう。

西遊記もいまでは、おとなにもこどもにも、ただたわいなく、孫悟空の活劇だけの物語にされていますが、作者のアトリエにはいって、作者のつかった材料そのほかを、ていねいにしらべたら、中國の傳説、童話の筋道をはっきりさせる上に、なにがしか役立つことでしょう。

西遊記が、シナ童話のほんとうの古典になるのはそのの ちです。

「シナのたとえばなし」は、中國で、寓言、寓喩、喩言などといっている、たとえばなしで

す。周の世の末、秦や漢の統一政府の出來る前、西暦五―二世紀の頃、シナが、いくつもの小さい君侯の國に分かれて爭っていたじぶん、政論家や学者たちが、そういう君侯に、じぶんのぎろんや考えをわかりやすく話すためにつくった、それはおはなしでした。ですからそれは、インドのたとえばなしが、教訓や説法のためにつくられたのとちがって、ギリシアのイソップ風にちかく、その時代の風俗と政治にかんけいのおおいものですが、そういう背景をはなれて、いまでも格言やとわざになって、のこって、人のこころにうったえる力のあるのは、どんな時にも、ものの眞実にかわりはないからです。

もくじ

三藏法師と孫悟空

序話　中國の童話と西遊記

上の巻　孫悟空の物語

一　天と地の精氣が凝って……三

二　ひととび十万八千里……二三

三　四海千山こわいものなし……四四

四　悟空おおいに天兵をうちやぶる……六一

五　仙人の桃……七七
六　悟空、二郎神の術くらべ……九五
七　如來の手……一〇九

中の巻　三藏法師の物語

八　経文とりの法師をもとめて……一二五
九　玄奘法師おいたち話……一三九
十　龍王の首……一五一
十一　地獄へ行った皇帝……一六四
十二　三藏法師の天竺行き……一七四

下の巻　八十一難（ぼうけん）の物語

十三　五百年目　孫悟空また世に出る……一九一
十四　袈裟どろぼう……二〇九
十五　八戒と悟淨……二二三
十六　人間のなる木……二四五
十七　黄袍の妖怪……二六九
十八　天をもりこむひょうたん……二八九
十九　火焔山まで……三二二
二十　火焔山八百里……三四六

二十一　大團円……三八八
はまぐりとかわせみ（シナのたとえばなし）……四〇七

装幀……恩地孝四郎
さしえ……鴨下晁湖
並に原本より

上の巻

孫悟空の物語

一　天と地の精氣が凝つて

石のたまご

むかし昔、大昔、世界は、はてしれず大きなくらやみのかたまりであった、ということでございます。

さて、それを、だれがかぞえだしたかしりません。この天地、宇宙の一年は、人間の年にすると、十二万九千六百年になるということでした。一年には春夏秋冬があり、一日には朝、晝、夜があり、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥の十二時に、むかしは分かれていました。十二時のうち、子、丑、寅が朝、それも夜明前、卯、辰、巳が午前で、午が正午、未、申が午後で、酉で日がくれ、戌、亥で夜になります。そこで、宇宙の一年を、さらに一日の十二時にあてると、子、丑、寅の夜明前に、天と地と、そのあいだにある人間世界がまずできました。

宇宙は、休まずいとなみをつづけながら、朝から晝栄えて、日ぐれになり、夜になり、だんだんおとろえて、ながいながい一年がおわります。そしてまた、つぎの宇宙があたらしく代ってできて、やはり十二万九千六百年にあたる一年がつづいて、三代めの宇宙になるのだ――と、まあ、昔のシナ人は、かんがえていたということです。すると、いま、わたくしたちの住んでいる宇宙は、なん代めの宇宙なのでしょう。

そこで、宇宙の夜明前、こんとん（混沌）と、シナの人が名をつけた、それこそ目も鼻もない、その大きなくらやみのかたまりは、ただぶよぶよと、それは、くらげが水の上にういているように、または、にわとりのたまごをわってお皿にうかしたように、とろり、とろりうごいていました。でも、そのなかには、もう、いろいろの生きもののうまれでる種子が、ほのぼのと芽をふきかけていたのです。するうち、このかたまりは、なかから、そろそろうごきだして、そのうち、ふうわりとかるい、空氣のようなものは、上へ上へと上がって、そこに天ができ、どろんとおもい、どぶどろのようなものは、下へ下へと下がっていって、そこに地ができました。やがて天には、日が出、月が出、星が出、その日と月と星がめぐりあるいて、朝とひるとよるがあり、これを辰（時）といい、日月星辰をあわせて、これを四象といいました、するうち、地には、水がわき、火がもえだし、山がそび

え、石がかたまり、土がもりあがりました。この水、火、山（木）、石（金）、土をあわせて、これを五行といったのです。

さて、あかるい大空の陽の氣が下にくだり、くらい大地の陰の氣が上にのぼります。そのあいだに、人間がうまれました。鳥けものも虫も魚もそだち、草や木がのびました。あとから生まれては、そだって、ふえて、つきることのない生きものの世界が、こうしてでき上がった――と、まあ、むかしのシナ人は、宇宙のなりたちを、こんなふうにおもってみて、これで天地人三つの位がきまったといいました。

そこで、この地の上の人間や動植物のすむ世界には、須彌山という、それこそ天までつきぬけるほどたかい山を、まん中にとりまいて、東に東勝神洲、西に西牛賀洲、南に南贍部洲、北に北拘盧洲という四つの大陸が、四つの大洋の上にうかんでいました。ですが四大洲のこらずが舞台では、あまりひろすぎます。そこで、そのなかの東勝神洲と南贍部洲と西牛賀洲とだけが、この西遊記新話の世界になるのです。

この東勝神洲の東の果ての海にのぞんで、傲來國という國がありました。その海の中に、天地のひらけるといっしょにわきだした花果山という山があって、それはまた、十洲三島

といって、仙人や妖精のすむという、十の國と三つの島の根になっている、たからの山でもあったのです。

さて、この花果山のいただきに、大昔から、高さ三丈六尺五寸、まわり二丈四尺という、とほうもなく大きな石がありました。まわりに、らんや芝草のしげっているほか、一本の木もないはだか山の上に、この大石は、宇宙ひらけてこのかた、なん万年、晝も夜も、雨風にさらされて立っているうち、たくさんある息のあなから、天地の氣をすいこみ、お日さまの光にあたためられ、夜はお月さまが露をすわせたので、ちょうど人間の母親が、こどもをおなかに宿すように、石のこどもを胎内にもつようになりました。そして、ある日、まんまるい卵のような子をうみおとしたのでございます。卵は、そとの風にふかれると、みるみる、目鼻のはっきりした石猿のかたちになり、手足もりっぱにそなわって、はいずりまわりました。するうち、ふたつの目をぱっちりひらいて、めずらしそうに、そこらを見まわしながら、ふと上を見上げますと、たちまち、その目の中から、ふたすじ、金の光が、きらきらかがやきだして、雲の上まで射とおしました。

そのとき、天のお宮の靈霄寶殿では、空の大神の玉帝が、おおぜいの天の神たちをあつめて、かいぎをしていましたが、とつぜん、あやしい光が玉座の上まで、まぶしく射上げ

てきたので、さすがの神様もおどろきました。
「なんというつよい光だ。このわたしすら、目をあけていられないくらいだ。」
こういわれて、さっそく、千里のさきまで見とおす千里眼、どんな遠くの風の音でもききわける順風耳という、ふたりの役人にいいつけて、ふしぎな光のしょうたいをしらべさせました。ふたりのものはまもなく、それが東勝神洲の花果山にすむ石猿の、目から射だす金色の光であることをたしかめて、もどってきました。
「しかし、石猿も、なみの猿どうよう、地の水をのみ、地のなり物をたべますうち、あやしい光も、しぜんとなくなりましょう。」
きくと、神様はうなずいて、
「なるほど、天と地の霊氣をうけてうまれた石猿なら、そのくらいのふしぎをみせることもあるだろう。」
といわれました。

美猴王

石猿は、猿なかまにまじって、まいにち、山の中をかけまわり、木の実、草の実をとってたべ、谷川の水をのんで、鹿やおおかみを友だちにして、よるは崖の下にねむり、ひるは洞の中であそんでくらすうち、春秋のうつるのも、年のかわるのも知らずにすぎました。
さて、それは夏の晴れた日でした。日があついので、猿たちは、すずしい松の木かげにあつまってあそんでいました。木によじる、花をむしる、実をとってなげる、とんぼやはちを追いまわす、おたがい、おすやら、つくやら、ひっぱるやら、そのなかの一ぴきだって、じっとしているものはありません。ふざけあって、あきると、みんなぞろぞろ、つながって谷へおりて行きました。そこには、水晶か眞珠をくだいて、とかしこんだかとおもうような水が、しゃあしゃあ、音をたてて、たぎりながれていました。
「きれいな水だなあ。いったい、この水はどこからわきだしてくるのか。」
たれもそうおもって、もっとさきへ行ってみたくなりました。そこで、またなかまどうし、よびあって、手をつないで、谷をわたり、沢をわたって、奥へ奥へとさかのぼっていきますと、きゅうに水音がたかくなって、大きな滝がひとすじ、その上からたぎりおちて、下でうずをわかしています。それが谷川になっているのです。
猿たちは、いっせいに手をたたいて、きゃっきゃっとわらって、よろこびあいました。

「こりゃあすばらしいぞ。この滝が川になって、ずっと山のそこを、どこまでもながれて行って、海へでるのだね。」

「すると、この滝のもとは、どこだろう。だれか、滝をくぐってみてくるものはないか。行って、ぶじにみとどけてくるものがあったら、みんなでおしたてて、おれたちの王さまにしてもいいな。」

「そうだ、王さまにしようよ。」

「それがいい、王さまだ、王さまだ。王さまだ。」

三ど、「王さまだ」という声があがったとき、

「よし、おれが行く、おれが行く。」

こういって、とびだしてきたものを、たれかとみると、石のたまごからうまれた、れいのふしぎな石猿でした。

「おもしろい。さあ行け、行け。」

みんなのわいわいはやすなかで、石猿は、目をつぶって、身づくろいすると、ひらりとおどり上がって、滝つぼのなかにとびこびました。

とびこんで、目をあいてみますと、なあに、滝とおもったのは水のしぶきのすだれで、

そのむこうには水がなく、からりとあかるい洞で、きれいな鉄の橋が、ひとつかかっていて、下に水が、岩穴からわきだしてながれていました。橋に上がってよくみると、洞のなかは、住みごこちのいいへやになっていて、松や竹のしげったあいだに、いいにおいの草花が、てんてんと咲いています。いり口に、石の柱が立っていて、その上に、大きな字で、

花果山福地　水簾洞洞天

と、ほりつけてありました。

石猿はうれしくなりました。そこで、また目をつぶって、ひとひねりからだをひねらせて、ぽんと滝のそとへとびだしました。そうして、まず、「はっはっは」と大きくわらってみせて、

「うまい、うまい、大もうけ、大しあわせ。」とさけびました。

猿なかまは、それっとみんなよってきて、なかはどうだ、水はおおいか、ふかいか、とたたみかけてききました。

石猿は、手をふって、

「ない、ない、水なんかない。りっぱな鉄の橋があって、その下にながれている水が、滝になっておちているのだよ。橋をわたれば、それこそ天然の石の室屋で、石の床に石の椅

子つくえ、石のかまどに石の鍋までかかっている。千人家内が、一生らくにたのしく住める。さあ、みんなついてこい。ついてこい。」

こういって、石猿が、また先に立ってとびこみますと、

「よし來た。」と、つづいてげんきよくとびこむのは、だいたんでぼうけんずきな若猿、「ほんとうかな。」と、頭をかしげながら、こわごわ首をちぢめてついて行くのは、じいさん猿、それでも、どうにかこうにか、さしもの猿の大家族が、ひとりのこらずおひっこしをすませますと、こんどは、てんでんが、お皿のとりっこや、鉢のうばいあいで、たれもかれも、ひろい洞穴の中じゅう、目まぐるしくかけずりまわっていました。そのなかで、石猿はひとり、まん中のいちばん高い台石にちんとすわって、大声でこういいました。

「猿のなかまも約束は守らねばならぬ。滝のもとをぶじに見とどけてかえったものは、おし立てて王にするといったことばは、かわるまいな。」

すると猿たちは、いちどにしずかになりました。そしていちどう、石猿をとりまいて、膝まずきながら、

「われらの大王さま、わたしども、きょうからは、おかげで安心してねむられます。千歳、千歳。」といって、みんな、ていねいに三拜の礼をしました。

そこで石猿は、この日から、猿こう、獼こう、馬こうはじめ、猿族のこらずをひきいて、猿王の位につきました。そうして、石猿の石の字をきらって、美こう王と名のりました。うつくしいお猿の王様といういみです。美こう王は、まいにち、たくさんの猿のむれにかしずかれながら、ひるは花果山に出て、一日あそびくらし、晩は水簾洞にかえって、ゆっくり休み、春の花、秋のくだもの、猿の國のたのしみの、ありったけをつくすうち、いつか三四百年の年月がすぎたのでございます。

仙人修行の旅

さて、たのしいあとかなしくなるのは、人間だけのことではありません。ある日、美こう王は、いつもの通り、おおぜい手下をあつめて、にぎやかなおさかもりのさいちゅう、きゅうに顔をくもらせて、しきりに涙をふいていました。みんなしんぱいして、

「大王、どうなされた。ご氣分がわるいのですか。」といってたずねますと、猿王は、目をしょぼしょぼさせながら、

「なに、病氣ではないが、こうして、今こそ、みんなと、おもしろくくらしているものの、

いつかは壽命がつきて、閻魔王のくらい國につれて行かれるのかとおもうと、つい涙が出てくるのだよ。」といいました。そういわれると、みんなかなしくなって、一座の猿ども、いちどに声をあげて泣きだしました。すると、そのなかからひとり、年をとった背長猿がとびだしてきて、大きな声で叱るようにいいました。

「みんな、なにをめそめそする。大王がきょう、そういう考えをおこされたのは、この上の道をまなぶ高いお志で、いちだんのしんぽというものだ。ところで、この世の中に、まだ三つ、閻魔王の自由にならないものがある。それは神と佛と仙人です。どうか、大王、いまから仙人の道をおさめて、不老長生の術のちからで、天地と壽命をくらべてください。」

美こう王は、そうきくと、にわかに、はればれとなって、あかるく笑いました。

「ほう、そんな術があるのか。よし、あしたさっそく、ここを立って行って、どんなにながい旅になろうとも、かならず仙人をたずねだして、不老長生の術をならってかえる。」

そこで、みんなもまた元氣になって、その晩ひとばん、にぎやかにはしゃいで、さわいで、猿王の送別をしました。そしてそのあくる日、松の枝をあんでつくった筏を、ひろい大海の上にうかべて、一本の竹竿であやつりながら、美こう王は、ひょうぜんと、あてどもない仙人修行の旅に出たのでございます。

さて、風と波のまにまに送られて行きますと、筏は、まいにち、南へ南へとながされて行って、いつか南大陸の南贍部洲の岸に漂着しました。上がってみると、漁師がおおぜいあつまって、網をひいていましたが、猿王をみると、おどろいて、網をすてて逃げだしました。猿王は、そのなかで、ひとり逃げおくれた漁師をつかまえて、着物をはぎとり、それを着ると、どうにか人間らしい様子になりました。そこで、のこの町へ出て、人間のなかまにまじって、見よう見まねに、ひと通り人間の礼儀作法をおぼえ、人間のことばがわかるようになったのです。

ところで、南贍部洲の人間は、たれもかれも、その日のかせぎにおわれていて、仙人の道だの、長生の術だのといってみても、たれひとり相手になるものがありません。美こう王は、また筏をあんで、万里の波の上にうかびました。

須菩提祖師

筏は、西へ西へとおされて行って、こんどは西大陸の西牛賀洲の岸にながれつきました。上がってみますと、ここは南贍部洲の繁華とちがって、人影もまばらな、さびしい國で、

いかにも仙人が住んでいそうな、奥ゆかしく、しずかなけしきの所でした。美こう王は、こんどこそ仙人の先生をたずねあてるつもりで、うつくしい林や野をいくつかすぎて、ひたすら奥へ奥へとはいって行きますと、はたして、むこうの山つづきのなかに、ひときわ、ぬきんでた山があって、半分雲にかくれてそびえ立った、その高い姿の神神しさといったらありません。

「ああ、いい山だ。」

猿王は、ついうれしくなって、かっさいいちばん、げんきよくけわしい岩山をよじて、まもなく頂上までのぼりつきました。のぼってみますと、下でながめたとは、またちがったおもむきで、仙人のよろこびそうな、めずらしい木や花のなかで、みなれないきれいな鳥が、たのしそうにうたっています。その声に、猿王はうっとり聞きほれているうち、林のおくで、ふと人声がしました。（おや、人間がいる。）そうおもって、声のするほうへたずねて行きますと、こんな歌がきこえてきました。

山の中では月日も知らぬ
谷をあるけば雲めがからむ

伐木とうとう、かんかんかん
薪賣って酒買や、いつでも春よ

山路ほそいが、お月さんあかるい
さめりゃ夜明だ、林がみえる
さわる枯れ蔦枯れ枝、おので
町で呼び賣り、お米で三升
栄耀知らずの苦労もなしの
相逢う処仙にあらずんば、すなわち道
静かに坐して黄庭（仙人のがくもん）を講ず
ままよ、ごろりと松の根まくら
崖をつたって、峯山よじて
きってたばねて、鼻唄まじり
これが相場だ、文句はいらぬ
とかく無慾がながいきのもと

猿王は、きくうち心がうき立ってきました。（さては神仙、こんな所にかくれてござった。）そうおもうと、もうむちゅうで、林の中にとびこみました。すると、木綿の布子をきて、竹笠をかぶったひとりの木こりが、うたいながら、斧をふるって柴を刈っています。猿王は、かまわずそばへよって、いきなり、

「仙人の先生、弟子の拜礼をおうけください。」といいながら、ぴょこんとあたまを下げました。

すると、木こりは、きょとんとした顔で、

「これこれ、めっそうもない、仙人の先生なぞと。わしは、ただの木こりじゃよ。」といいました。

「それでも、いまし方、

相逢う処仙にあらずんばすなわち道　　静かに坐して黄庭を講ず

と、おうたいになったではありませんか。」

こういうと、木こりはわらいだしました。

「はっは、あの歌か。ありゃあ、うちのちかくに住んでござらっしゃる、それこそ仙人の先生が、わたしが、ひとりの母親をやしなうために、まいにち、苦労して柴を刈って、町へ出てわずかなあきないするのを、かわいそうだといいなすってな、ほれ、しごとのあいだに、こんな歌でもうたって氣をまぎらせといって、しんせつにつくって、おしえてくださったものじゃよ。」

仙人の先生ときいて、猿王は、おどり上がってよろこびました。

「すると、その仙人の先生のおすまいはどこですか。ごしょうだ、すぐそこへ、わたしをつれて行ってください。」

木こりはきいて、あきれたように、

「この男はなにをいうか。はやくこの柴を刈って、きょうのうち銭にしなければ、母子の口がひ上がってしまうぞ。なにもめんどうなことはない。それ、そこに小路がある。それをつたって、山道を一里半ほどのぼって行くと、斜月三星洞と、札の出た洞あながある。そこに、須菩提祖師といってな、徳のあるのできこえたお年より仙人さまが、もとから住まってござらっしゃる。いまでは、お弟子も三四十人あって、あけくれ仙人修行しているよ。まあ、たずねて行ってみなさるがいい。」

と、こういわれて、猿王もおしてはたのめず、半分うたがいながら、木こりの指さすほうがくにむかって、仙人の洞をさがして走って行きました。

しあわせと山道にもまよわず、しばらく行くと、むこうに、ひとすじ霞がたなびいて、大きな洞門らしいものがみえました。そばへよってみますと、岩の門がかたくしまっていて、崖の上に高い石の柱が立っていました。それには大きな字で、

靈台方寸山　　斜月三星洞

と、一行にほりつけてありました。

猿王は、すぐとは門をたたかず、しばらく様子をうかがううち、空腹をかんじたので、門そとの木の梢にのぼって、松の実をとって、ばりばりかんでいますと、ふと、音もなく門があいて、祖師につかえているものでしょう、ひとりの仙人童子が出てきて、

「そこで、なにか、ごそごそやっているのはだれか。」としかりました。

猿王は、あわてて枝からとびおりて、ていねいに腰をかがめながら、

「けっして、ごそごそいたしてはおりません。仙人の道の修行がいたしたく、とおくから、まいったものでございます。」といいますと、童子はわらって、

「おまえか、修行のものというのは。いまし方、老師は講壇にのぼって、いつもの通り、ご法話をなさりながら、きゅうにとちゅうで、おもてに修行のものが來ている、行ってみよといわれたので、來てみると、松の木にあがって、ばりばりやっているものがある。まさかそれが、仙道修行のものとは知らなかったよ。まあ、ついてくるがいい。」といいました。

案内されてはいってみますと、正面いちだんたかい台の上に、老師はきちんと坐って、三十人あまりの小仙人たちが、そのまわりに、列をつくっていました。猿王は、さかさになっておじぎしながら、口のうちで、

「おねがいでございます。お弟子にしてください。」と、もそもそつぶやきました。

「どこのものだ。名はなんという。」と、老師がたずねられました。

「東勝神洲、傲來國、花果山水簾洞のものでございます。」

すると、老師は、いきなりおおごえでしかりました。

「出てうせい、この大うそつき。そんな遠方から、どうしてここまでこられるか。」

「けっしてうそではございません。ふたつの大洋、ふたつの大陸をわたって、十なん年かかって、やっとここまでまいりました。」

「ふん、それで姓名は。」

「父もなく母もなく、姓名もございません。」

「すると、木のまたからうまれたか。」

「木のまたではございません。石のはらからうまれました。」

老師は、にこりとしました。

「大昔、花果山にできたふしぎな石が、ある日われて、わたくしを生みました。」

「ふん、そこで天然しぜんに生まれて出たというのか。ひと走り走ってみせよ。」

猿王は、身がるに、ちょこちょこと二ど走ってみせました。それを老師がみて、わらいながらいいました。

「どうも松の実をかじる猿の様子をそのままだ。猿をむづかしい字で胡猻とかく。胡猻の猻の字から、けものへんをとって、ただ「孫」と姓を名のれ。それから弟子どもに分けてあたえる名前の文字が十二ある。そのなかから、「悟」の字をえらんで、悟空とつけよう。」

猿王は、おじぎひとつしていまいした。

「けっこうです。それではきょうから、わたくしの名は孫悟空。うれしいな。」

二　ひととび十万八千里

不老長生の秘訣

孫　悟空という名もでき、仙人なかまの弟子入をゆるされますと、猿王は、その日から、兄弟子のさしずをうけて、まいにち、朝は早くから谷におりて水をくみ、林に入って薪をきる、庭そうじから、畑の世話と、不老長生の術をおぼえたい一心で、まめに立ちはたらくうち、いつか六七年すぎました。

ある日、須菩提祖師は、いつものように、講壇にのぼって、ゆるゆると神仙の道を説きはじめました。弟子たちはみなかしこまって、しずかにきき入っています。悟空も、そのなかにまじって、神妙にひかえてはいましたが、どうもむつかしい話でよくわかりません。やがてたいくつして、耳をつまんだり、あごをつねったり、目をぱちくりさせて、ひとりくつくつ笑いしているうち、ついおもしろくなったものか、立ち上がって、おどりだしま

した。

老師が、みとがめて、

「悟空、なにをさわぐ。わしの話をきかぬか。」といいますと、悟空はぬからぬ顔で、

「先生のお声が音樂のようにたのしいので、ついうかれておどりました。」といいました。

祖師はわらっていいました。

「ふん、なんじにそれがわかるか。ではきくが、なんじ、ここに來てなん年になるぞ。」

「ぼんやりくらして、時節のうつるのがわかりません。ただ、かまどの下の火がなくなると、うら山にのぼって、薪をとってきてくべます。山にはみごとな桃の木がありまして、その桃の実を、もう七へんとってたべました。」

「うらの山は爛桃山というが、その桃を、七へんまでとってたべたというと、もう七年になる。この上わたしにつきしたがっていて、いったいなにをまなぶつもりだ。」

「先生のおさしずにしたがって、すこしでも道の修行がいたしとうございます。」

祖師はそのとき、ことばをあらためていいました。

「道とひとくちにいうても、そのうち三百六十もの門にわかれた、まなび方がある。どの門の道をまなびたいか。」

「先生のおおしえくださる通りにいたします。」

「『術』の字の門はどうか。この門をまなべば、卜ができて、吉凶禍福がわかる。」

「それをおぼえると、なが生きもできますか。」

「できぬ。できぬ。」

「じゃあ、やめましょう。」

「では、『流』の字の門はどうか。これだと孔子の教もわかり、ほとけのことも、仙人のこともわかって、おいのりも、まじないもできる。」

「なが生きもできますか。」

「そうさな、これでなが生きしようというのは、壁の中に柱をたてるようなものだ。家がくずれるまで古くなれば、柱もいっしょに、朽ちずにはいまいて。」

「じゃあ、そいつもやめだ。」

「『静』の字の門はどうだ。なにもせず坐って禪をくむ、定にはいる。慾も、とくもなく、こころのしずまる、まことによい道だがな。」

「なが生きのほうはどうですか。」

「この門にはいって、なが生きをのぞむのは、かまどにのせただけの土瓦かな。」

「なんのことですか、それは。」
「燒かない瓦だ。雨にあえばすぐくずれる。」
「それではやめます。」
「『動』の字の門はどうか。陰をもって陽をおぎなう。腹をさすってつかえをなおす、按摩の術だな。」
「それで、なが生きはどうですか。」
「まず水中に月をさぐるところかな。月は天にあって、水の中にはない。」
「それではだめだ。ならうのはごめんです。」
ここまでいったとき、祖師は大喝一声、「咄」とさけびました。とおもうと、いきなり壇をとびおりて、手にもった戒尺（ひょうし木）をふり上げたまま、「このくそ猿、あれもいや、これもきらいと、ぜんたい、なにをまなぶというのか。」というなり、三ど、悟空のあたまにうちおろしました。そうしながら、手をうしろにまわして、せなかをたたいてみせました。すると、そのまま、つうと、中へはいって、ぴったり戸をしめてしまったのでございます。
おおぜいあつまった弟子たちは、なんのことかわからず、あっけにとられて、老師の姿

をみおくっていましたが、話のとちゅうで行ってしまわれたので、みんな悟空をとりまいて、不平たらたら、
「このわる猿、つまらぬことを言やあがって、先生をおこらせ、おかげでおれたちが迷惑する。」
こう、てんでんぶつぶついっているなかで、悟空はへいきでわらっていました。それというのが、老師がいま、してみせたことは、みんなの前で話せない謎で、戒尺で三どうったのち、せなかをたたいて戸をしめてはいったのは、今夜の三更、夜中の三時すぎて、うら門からそっとはいって、戸をしめろ、仙人のひけつを傳授するということだと、すぐにさとったからでした。ですから、たれになんといわれようとかまいません。だまって、たたにこにこ、心の中のよろこびを、かくしきれずにいたのです。
こうなるともう、その日一日のくれるのが、待ちどおしくてなりません。やっとよるになって、なかまの弟子たちみんな寢しずまってから、悟空はひとり目をさましました。鼻からすう息のひえてくるかげんで、夜中すぎたことを知ると、そろそろ着物をきかえて、そっとおもて門をぬけだして、うら門にまわってみました。すると、はたして、門の戸が半分あいています。悟空は、おもわず「占めた。これだ。」と、小ごえでつぶやきながら、

そっとはいって行きますと、老師は、寝床の上にからだをかがめて、ぐっすり寝入っています。悟空は、そこで、音を立てないように、その下にかしこまって、老師の目をさますのを、しずかに待っていました。

やがて目がさめたらしく、老師は両足をのばして、口のなかで、歌うようにつぶやきました。

「入りがたし道のおく山
心知るものにあわずば
たれつたえん道のおく山
いたずらに舌枯らすとも。」

そのとき悟空は、すかさず、

「先生、悟空がまいりました。」といいました。

祖師は心のなかで、なるほど、天地の精氣をうけてうまれた霊物の石猿、よくもわが心の中の謎をときあてたと、よろこびました。

そこで、須菩提祖師は、孫悟空と膝と膝をつきあわせ、一一、口うつしで、仙道のふかい奥義と不老長生の秘訣をつたえました。きくうち悟空は、心にかかった雲か霧のようなものが、そばから、すうすう晴れ上がって行くようで、きゅうにからだがかるくなりました。さて、老師のふかい恩義にありがたくお礼をのべて、そとへ出ますと、とうに、東の空が白んで、朝の光になりかけていました。祖師にいわれたことばは、ただのひとことともわすれずにおぼえています。悟空は、またそっとおもて門をあけてはいって、ぐすぐすと寝床にもぐりこみましたが、やがて枕をたたいて、大ごえに、

「夜があけた。夜があけた。おきるんだ。おきるんだ。」と、さけび立てました。その声でみんな目をさまして、なんだ、悟空のやつ、いやに早いな、といいいい、目をこすりましたが、たれも、どんないいことを、夜中に悟空がして來たか、ついさとるものはなかったのでございます。

変化自在

そののちまた三年すぎました。悟空は、祖師の口ずからつたえられたひみつを、よくか

み味わって、よるひる、ひとりで、あれかこれかと、工夫に工夫をかさねるうち、だんだん仙人の術が、からだについて來たようでした。するとある日、いつものご法話がすんだあと、祖師は、悟空を近くによびよせて、

「どうだの、悟空、いくらか修行ができたかの。」といわれます。

「おかげさまで、このごろすこぶる、道の大源に会得が行ったようにぞんじます。」

「いや、いかに修行がつんでも、なんじ、三つのわざわいはのがれぬわい。」

「はて、道ふかく徳たかければ、天地と壽命をくらべ、百病もおこるすきがないと申します。どうして、三つのわざわいをのがれることができないのですか。」

「なに、いかほど神仙の修行をつみ、天地自然のひみつをさぐり知ったにせよ、五百年のち、かならずいちど、かみなりのわざわいが下って、なんじのからだをこなみじんにくだくであろう。それには、心をあきらかにもって、あらかじめ、そのわざわいをさけるほかはない。だが、それがすむと、また五百年で、しぜんに、からだの中から、ぢごくの火がもえだして、五臓六腑を焼き、手足を枯らし、千年の苦行を、ただひとときに灰にしてしまう。さて、さいわいそれをのがれても、また五百年して、またもぢごくの風が、脳のうしろから吹きこんで、からだじゅう荒らしまわり、骨も肉もばらばらにふきはがしてしま

う。」

そうきいて、悟空は、きゅうに身の毛がよだってきました。そこで平身低頭、十拜百拜して、どうか三つのわざわいをのがれる法をおしえていただきたい、といってたのみました。すると、老師はわらって、それはむつかしいことではないが、どうもおまえは、形こそ人間に似ているが、あごがみじかいからだめだというのです。悟空もわらいながら、あごをさすってみて、そのかわり、智恵袋はおもとうございます、といいましたが、老師はとりあわず、それよりか、どんな危難にあっても、なんとか逃げみちのみつかるように、変化自在、なんにでも姿のかわるからだにしてやろうといわれたので、悟空はあたまをたたいてよろこびました。

そのとき、老師はいいました。

「変化の法にふたつある。天こう星（北斗星）の星の数にあわせれば、三十六とおりの変化がある。地さつ星の星の数にあわせれば、七十二の変化がある。」

「それはなんでも、数の多いのにこしたことはありません。地さつ星のほうに、ねがいましょう。」と、悟空はこたえました。

「よくのふかいことをいう猿だな。」と、祖師はわらって、悟空の耳に口をつけて、なにか

こっそりささやきました。ところで、ひとつ、孔の口があけば、百の孔がそれから通じるどうりですから、これでたちまち、七十二とおりの地さつ変化を、悟空は自分のものにしてしまったのでございます。

それからまた、いく日かたちました。ある日、ご法話のすんだあとで、祖師は、弟子たちと洞門のそとに出て、うつくしい夕げしきに興じていましたが、ふと悟空のほうをふりむいて、

「悟空、なんじ、このごろ雲にのる術をおぼえたそうだが、ひとつ、やってみせよ。」といわれました。悟空は、とくいになって、さっそく雲をよぶと、からだをゆすぶってとび上がりました。さて、五六丈のところを、とびはとんだものの、ものの五町と行かないうちに、おちてしまいました。老師は、おもしろそうにわらって、

「なんだ、それが雲にのるといえるか。雲の中をはいまわるだけではないか。」といって、またあらためて口づてで、きんと雲の法をおしえました。「きんと」というのは、からだをさかさまにしてでんぐりがえることで、この雲にのれば、でんぐりがえしひとつ打つあいだに、十万八千里（日本ふうにいえば、三万里）のとおくまでとべるというのです。

「仙人が雲にのるときは、両足を爪立ててのる。おまえは、両足をぺったり地につけている。まず印をむすんで雲をよぶ。呪文をとなえながら、足を立て、しっかり拳をにぎりしめて、ひらりとかるく雲にとびのる。いったんのれば、十万八千里はひととびだ。」

こう祖師は、しんせつにおしえてくださる。それが、うらやましいのか、弟子たちは、いっせいにわらって、口ぐちにはやし立てました。

「悟空が、うまくきんと雲にのれたら、人間ももう飛脚をたのむことがいらなくなるな。」

なにをいわれても悟空はへいきで、それからは、ひまさえあれば、雲にのるけいこをはげんで、まもなくきんと雲の法を、自由自在につかうようになりました。

それからまた、時たって、それは夏のあつい日ざかりでした。弟子たちは、みんな涼しいかげをさがして、洞門のそとに出ていました。なかまは、なんとかして、悟空をこまらせて、なぶってやりたいとおもっているので、

「悟空、三つのわざわいをのがれる法だの、きんと雲だのと、老師から、だいぶうまいことをおそわっているが、どうだ、あっといわせるような術を、ひとつ、おれたちにみせてもらいたいものだな。」と、そのなかのひとりがいいました。

そういわれると、そこはお猿の本性で、悟空は、ついのり氣になりました。

「まあ、なんでも題を出してみたまえ。やってみせるよ。」

「じゃあ、松の大木になって、みんなをすずませてくれ。」
「よし、おやすいご用。」
こういうがはやいか、悟空は印をむすび、呪文をとなえて、ひとゆすり、からだをゆするとおもうと、猿のからだはみえなくなって、したたるようなみどりの葉を、いっぱい茂らせた松の大木が、みごと、そこに大きなかげをつくって、そびえ立ちました。
「ほう、猿め、うまく化けたな。」
みんなは、いっせいに手をたたいて、わっとわらいはやしました。そのさわぎが、奥までもきこえたとみえて、老祖師は、杖をひきひき出てきて、
「なにをがやがや立ちさわぐか。」としかられました。
弟子たちは、あわててかしこまります。悟空もすぐ本身にかえって、草むらの中に小さくなっていました。
「修行者は、ただ口をあいただけでも心がちる。かりにも舌をうごかせば、よしあしのうわさが出るという。こののちはつつしめよ。」
祖師は、こうさとして、みんなを去らせたのち、悟空をよびとめて、いいきかされました。

「しかるのではない。だが、なんじ、きょうかぎりここを出て行け。この上、ここにとどまっていれば、ほかの弟子どもが、かれらにできない術を、なんじひとり知っているため、それをうらやみねたんで、術をおしえよ、おしえなければ、仇をするぞと、おどすにちがいない。むこうはおおぜい、こちらはひとり、そのうち、いのちまであやうくなる。だから、ここでわかれてかえれ。」

悟空は、涙をながして、

「海山のご恩をいただきながら、どうしてこのままかえれましょう。かえれといって、どこへかえればいいのでしょう。」というと、祖師はそのときまた、大喝一声、

「ぜんたい、なんじ、どこから來た。」といいました。

そのひと声で、悟空ははっとさとりました。

「なるほど、わたくし、本來、東勝神洲花果山のものでございました。二十年るすにしましたふるさとを、いまおもいだしました。それにつけても、このままではご恩がえしが。」

「恩もなにもない。こののちなにをしても、けっしてわたしの名を出すなよ。」

悟空は、たびたびあたまをさげ、涙をながして、老師にわかれを惜しんだのち、きんと雲をよんで、ひらりととびのると、ひととびに十万八千里、まもなくなつかしい花果山水

簾洞は、目の前にあらわれました。悟空は、もうなにもかも、これまでのことはきれいにわすれて、ただこれからのたのしさに、心がおどるようでした。

むかし、ここを出るとき　凡骨凡胎(ただの人間の子)の重いからだ。
いま、道を得てかえれば、　なんと軽いこの身ぞ。

混世魔王

悟空はそのとき、ひらりと雲をおりて花果山の上に立ちました。すると、大空までとどくかとおもう、するどい鶴のなき声がしました。その声にまじって、腸のちぎれるほどに、かなしい猿のさけび声がきこえてきました。猿王は、どうしたことかあやしみながら、大声で、

「せがれども、いまかえったぞ。」と、呼んでみました。

すると、洞のまわりの草むらや、林の中から、大小の猿が、ぞろぞろつながって出てきました。そして、昔の美こう王の姿をみつけると、さもうれしそうに、いっせい、ときの

声をあげました、
「大王、どうしてこんなにゆっくりしていらしったのです。おるすのあいだに、水簾洞は、すっかり妖魔のために荒らされてしまいました。それは、わたしども力のあらんかぎりふせいでみたのですが、どうにも手ごわくて、こどもや孫はとられる、物はかすめられる。せっかく千年万年もと、たのしんだ山の洞も、もうこの上もちこたえる力はない、はやく大王がかえっておいでになればいいと、まいにち、そればかりをたのみに、待ちこがれていたところです。」
そうきくと、悟空は、まっ赤になってたけりました。
「ぜんたい、それはどんな妖魔だ。名はなんという奴か。くわしく話せ。」
「世の中をひっかきまわすと、じぶんから名のる、混世魔王とかいうやつで、すぐこの山の北のほうに巣があるらしいのですが、なにしろ雲にのって來て、霧でも風でも雷でも電でもおこして、かえって行くのですから、はっきりしたことはわかりません。」
「よし、おれが來た上は、ただひとひしぎだ。お前たち安心して、しばらく、そこであそんで待っているがいい。」
こういいのこすと、猿王は、またきんと雲にのり、北のほうがくにむかって行きました。

すると、なるほど一座の高い山があって、かなりけわしく、奥ぶかい様子が、いかにも妖魔の巣窟らしくみえました。雲をおりて、洞門に近よってみますと、五行山水臓洞としるした柱が立っていて、小妖が二三十人かたまって、おもしろそうにはねまわっています。悟空はいきなり、そのむれの中にわってはいると、みんなおどろいて、ばらばらと散って行きました。そのうしろから、悟空は声をかけました。
「やい、逃げるな。混世のくそばけものにいえ。花果山水簾洞のあるじが、ご用があるとな。」
小妖どもは、あわてて洞の中にかけこんで、
「大王、たいへんです。おもてに、えて公の親方らしいのがやって來て、花果山水簾洞のあるじだとわめいています。」
魔王はきいて、せせら笑いながら、
「ふん、猿なかまに大王と立てられているやつがあって、そいつは、とうから出家修行に出て、ゆくえが知れないときいていたが、いったい、どんな野郎だ。」
「まあ、僧とも道士ともつかないくりくり坊主で、あかいべべを着て、得物ひとつもたず、から手をふりまわしてわめいていますよ。」

「ようし。それ、よろい物の具だ。」
魔王は、さっそくよろいを着、かぶとをかぶり、大刀をかかえて、とびだしました。
「水簾洞のあるじという奴、どこにいる、出てこい。」
こうどなると、悟空もまけずに、
「このわるばけもの、孫大人が、目にはいらぬのか。」と、やりかえしました。
すると、魔王は、かんらかんら、わらって、
「なんだ、四尺にもたりない小野郎が、しかも、から身でおれさまにむかってくるとは、だいたんか、氣ちがいか、身のほど知らずな野郎だぞ。」
「はてさて、このわるばけもの、目さきのみえぬにも程があろう、ちいさいとばかにするが、大きくなりたいとおもえば、雲の中までつきぬけて、この二本のから手が、空のお月さまでもとってみせる。まず、このげんこつをくらえ。」
いうがはやいか、悟空のこぶしは、魔王の横面めがけてとびます。魔王は、手をのばして、やっとうけとめます。
「ぎさま、ちんぴらのくせにして、ほんとにから手でむかってくる氣か、すると、大きいおれが、大刀をふりまわすのもおとなげないわい。」

魔王は、からりと得物をなげすてて、これもまけずにこぶしをかためます。それからは、から身同士、はるやら、つくやら、足をあげてけつけるやら、しばらくはせりあいましたが、大男の魔王が、ながすぎる手をもてあますすきをくぐって、ちいさい悟空は、魔王のまわりをくるくるまわって、みじかいこぶしで、胸といわず背といわずつきまくるので、あいてはすっかりよわらされました、そこで、身をかわして、そとにとびだし、また大刀を引きぬいて、悟空のまっこうから、ただひと打ちと切りおろす、それを悟空もいちどはそらして逃げましたが、かなりにどうもうな相手とみたので、そこで、はじめて、きみょうふしぎな、身外身の法というのをつかいました。
悟空はそのとき、まず、ひとつかみ、身の毛をぬいて、口に入れてかみますと、それを空にむけて、ぷっと吐きだしながら、ひとこえたかく、
「かわれ。」とさけびました。とたんに、その毛は、二三百もの小猿になって、わっとあつまってきました。いまでは、悟空もただのお猿ではありません。神変ふしぎな仙人のお猿です。身の毛だけも、八万四千本もあって、それが一本一本、ひとりひとりの悟空にもなれば、注文どおり、そのほかのなんにでもかわります。その悟空の身をわけた小悟空が、右から左から、わんさわんさ、魔王にとりついて、前からおす、うしろからひっぱる、目の

中にとびこむ、鼻の孔をくすぐる。手どり足どりきそいかかるのですから、さすがの魔王ももてあまして、腕に力がはいらず、くうにだんびらをふりまわすだけになりました。悟空はすかさずその手もとにとびこんで、大刀をうばいとると、ぐんなりしかけた魔王のあたまの上にとび上がって、まっぷたつになれとうちおろしました。とたんに、その山のようなからだが、地ひびきを立ててたおれました。つづいて、洞の中にかくれひそんでいる手下の小妖ども、のこらず切りほろぼして、さて、「もどれ」とひとこえ、それで、とびだした三百の小猿は、もとにおさまります。それでもどってこない小猿は、花果山からさらわれて來ていた、これはほんものの小猿でした。ところで、その小猿ども、ここまでくるときは、魔王のあやしい魔風につつまれて、どこをどう來たか、道も分からずつれてこられたのですから、こんどはどうして花果山へかえったものか、といってさわぐのを、悟空はわらって、一陣のつむじ風をおこしますと、たちまち、小猿のひとむれを引きつつんで、まばたきするまもなく、水簾洞にかえりました。小猿のきょうだいが、それをとりまいて、またひとしきり大よろこび、のこらずが、大王の前に平伏して、あらためて、二十年修行の徳をたたえたのでございます。

そのとき、悟空は、にこにこしながらいいました。

「おい、おまえたちに、もうひとつ、いいおみやげがあるよ。それは、猿のなかまに、名字ができたことだ。おれは修行のあいだに、仙人の先生から、姓は孫、法名は悟空と、姓名をいただいた。だから、おまえたちも、これからは人間同様、孫と姓を名のれ。」

こうきいて、猿どもは、いっせいに拍手かっさいしました。

「では、大王は、老孫公、わたしどもは、じゅんに、孫二郎に、孫三郎か。なんにしてもめでたい、めでたい。」

三　四海千山にこわいものなし

お猿の兵隊

さて、孫悟空の美こう王は、古巣にかえるとさっそく、混世魔王をたいじて、大刀をひとふり手に入れてから、まいにち、あそび半分劔術のけいこをはじめ、手下の小猿たちにも、竹槍や木刀をつくらせて、兵隊ごっこに日をくらしました。そのうち、ふと氣がついて、こんなことをして、おもしろがっているところを、人間や鳥けもののなかまにみつかると、猿め、あんなことをして、いまに攻めにくるしたくではないか、とうたがわれて、ぎゃくに、むこうから兵隊をむけられるかもしれない。まん一のばあい、竹槍や木刀では、勝負にならない、こりゃあどうしても劔や戟の入りようができてきた。と、こう猿王はかんがえて、腕をくみました。

そうなると、小猿どもは、ただあおくなってこわがっているばかりです。そのうち、な

かから四にん、年よりの尻やけ猿がふたりと、背長猿がふたり、出てきて、

「大王、ご心配にはおよびませんよ。この山から東にむかって、三四十里行くと、國ざかいで、そのむこうが傲來國です。そこへ行けば、劔でも戟でも槍でもなんでもあるし、金銀銅鉄おこのみしだいに打つ、かじやもいます。」といって、その國の繁華なありさまを話してきかせました。悟空は、きくと大よろこびで、さっそくきんと雲にとびのって、傲來國に出かけました。すると、なるほど、王様のすむ大きなお城があって、町は晝中の人出でにぎわっています。そこで、行ってたのめば、なんでもそろえてくれそうですが、一一買いあつめるのもめんどうだ。なにしろ手っとりばやいのにかぎると、そこは、氣のみじかいお猿の本性です。悟空は、れいのひみつの印をむすび、呪文をとなえて、巽のほうがくにむかって、すうっとひと口、風を吸いこんで、ぷうと吹きだしますと、たちまち一陣のつむじ風、天も地もまっくらななかに、砂と小石が、雨あられととびます。下では、人間が悲鳴をあげてにげまわります。どこの家も窓や戸をしめて、なかでちいさくなっています。そのまに、悟空は、王様の武器庫にはいってみますと、なるほど、槍でも戟でも、斧でも鉞でも、よりどりしだいですが、いかに悟空でも、ひとりでそれはもちきれません。そこで身外身の法をつかって、ひとつかみ身の毛をぬいて、ひとこえたかく、

「かわれ。」といいますと、千人あまりの小悟空隊が、たちまち、そこにあらわれました。そのひとりひとりに、大きいのは五六本、ちいさいのでも三四本、てんでんにぶんどりの得物をかつがせて、えっさえっさ、花果山まではこんで行かせました。そして、それを水簾洞の上に、ばらばら投げおとすと、また、「もどれ。」という号令で、ちび兵隊はのこらず、悟空の身の毛におさまってしまいました。

さて、ひとりひとり、ほんものの槍や劔に弓矢までもたされて、小猿どもの、よろこびようといったらありません。さあ、とらでもおおかみでも寄せてこい、ひょうも熊もこわくはないぞと、みんなりきみかえって、夜があけるから、くれるまで、チャルメラや鐘と太鼓のあいまには、ときの声が、山や谷をふるわせました。このいせいにおどろいたか、花果山ちかくにすむ、すべて七十二洞の妖王どもが、あらためて悟空大王の民になり、桃、栗、柿のみつぎ物をたてまつることをちかったのでございます。

如意きんこ棒

さて、こうなると、悟空大王、じぶんの力いっぱいつかえる武器がほしくなりました。

それに劔や刀は、もともと、お猿のとくいな得物ではないのです。すると、れいの四にんの年より猿が、

「大王は神通自在だから、水をくぐることでもできるでしょう。龍宮へ行ってごらんなさい、龍王のたくわえている寶のなかに、きっとめずらしい得物がありますよ。」といっておしえました。

きくともう、悟空は「よし、すぐ行ってくる」というなり、洞のそとにとびだし、橋の上に立って、水のながれをとめる閉水の印をむすぶと、たちまち水がふたつに分かれて、かわいた通り路ができました。さて、またたくまに、東洋海の海底まで來ますと、巡海夜叉といって、見まわりの役人が見とがめて、

「水を分けて、くだっておいでになったのは、どういう神仙でございますか。」と、びっくりしたようにたずねました。猿王は、もったいらしく、

「わたしは、花果山天然自生の神人さ。おまえのところの老龍王とも、いたってちかしい仲だ。それをどうして知らんのだ。」といいました。

役人は、ますますおどろいて、さっそく水晶宮にいる東海龍王に、そのとおりしらせました。龍王もあわてて、むすこや孫の小龍に、えび、かにの二將をしたがえて、出むか

えました。
「大仙人、よくいらっしゃいました。あなたは、いつどこで、どういう仙人の術をおならいになりました。して、ご用はなんでしょうか。」
「長年の修行で、生まれず死なず、無生無滅、天地と壽をくらべる仙体をうけたものです。こどもらのために山の洞をまもるによい武器を、ごひぞうの寶の中から、ゆずっていただきたいのです。」
龍王は、ことわりもならず、しぶしぶ、けらいの魚にいいつけて、まずひとふりの大刀を出させました。悟空は、でも、「どうも刀は不得手だ。」といって、手にもとりません。ではといって、九つに股の分かれている大叉をはこばせました。悟空は、ちょっと手にもってみましたが、「軽い、軽い、つかえない。」といって、すぐほうりだしました。
龍王は、にがわらいしながら、
「大仙人、まあよくみて下さいよ。これでも三千六百斤、目方がありますが。」といいましたが、悟空は、
「だめだめ、つかえぬ。」といっただけです。龍王は、きみがわるくなって、こんどは七千二百斤、方天戟と名のついた、大きいほこをもちださせました。悟空は、それもかるがる

とぶら下げてみせて、
「やはり軽いね。」といいました。
龍王はこわくなりました。それで、
「それでも、もうこの上重い得物は、龍宮にはありません。」といいました。悟空はわらって、
「昔からいうね、海龍王、寶がないとて、べそをかくってね。まあ、もういちどよくさがしてみて下さい。お礼はするよ。」
龍王は、こまったように、
「まったく、このほかにないのです。」と、あたまをかきました。
するとそのとき、龍王の奥さんの龍婆が、ひょっこり、うしろから出てきて、龍王の袖をひいて、そっとささやきました。
「大王さま、この仙人めをいいかげんにあしらうと、やっかいなことになりますよ。このあいだから、ご寶藏の、ほれ、大むかし大禹王が、黄河の大水をとめたとき、水のふかさをはかりなさったという、あのとてつもなく大きな鉄の定子が、ぴかぴかお藏のそとまで光りだして、とても神神しい瑞氣が立ちのぼっておりますのは、きっとこの仙人どののく

るしらせででもございましたろうよ。」
こういわれて、龍王は、半分うたがいながら、まあなんでもいい、はやくみせて、追いかえそうとおもって、悟空を寶藏に案内しました。なるほど、行ってみますと、ひとすじ、金の光が、かくやくと、藏のなかからさしています。
悟空は、腕まくりして、その鉄の定子にさわってみました。それはながさが二丈もあって、一斗桝ほどもまわりのある、ふとい鉄の柱でした。さすがの悟空もおどろきましたが、両手で力まかせにかかぇあげて、
「こりゃあ、ちとふとくて、長すぎる。もちっとみじかく、ほそくなると、ちょうどおあつらえむきなのだが。」と、こうつぶやくと、どうでしょう、みるみる、柱はなん尺かちぢまり、まわりもひとまわりほそくなりました。
「ようし、もうひといきほそくたのむよ。」
ふしぎな柱は、ほんとうにまた、いわれるとおりほそくなりました。猿王は、大よろこびで、それを、よちよちそとへかつぎ出して、よくみますと、両方のさきに、金のたががはめてあって、あいだは、まっくろな鉄線でぎりぎりまいてあり、その上に、
「如意金箍棒」

と、五字、一行にほり込んでありました。これは、ながくもみじかくも、ふとくもほそくも、おもいのままな金たがの棒といういみです。目方は一万三千五百斤。なるほど「如意」——意のごとくになる、きみょうなたからものであるらしい。そこで、猿王は、また手でさわってみて、
「それ、もちっとみじかく、ほそくなると、なおいいぞ。」といったのです。棒はさっそく、またちぢまって、いよいよ藏のそとまでもちだしたときには、二丈ほどのながさに、まわりも、お椀ぐらいのさしわたしで、手ごろな鉄の棒になっていました。それでも、悟空がそれをかかえて、さっそうと、もとの水晶御殿にもどってきたとき、老龍王も、小龍王も、ぶるぶるふるえて、口がきけずにいました。まして、大小の魚どもはこわがって、みんな藻草や岩のなかにかくれたほどでした。
ところで、猿王、おあつらえ通りの武器を手に入れて、これでおとなしくかぇって行くとおもっていますと、かぇって、とんだ上きげんになって、こんどは、
「龍王さん、そこでもうひとつ、おたのみが、あるのだがね。なにしろ、なが年遠方へ旅に出ていて、着物もだいぶぼろぼろになった。よそ行きのうわっぱりが一着ほしい。ついでに、さがしだしてくださらんか。」といいだしたのです。老龍王もあきれましたが、こわ

ごわ、

「どうもそれだけはおあいにくで。」といって、ことわりかけますと、猿王は、てんでとりあわず、

「一客、二主をおかさずといってね、いちどに二軒の家のお客になるものじゃないというから、ぜひこのうちでもらって行きたいのです。」といって、うごきません。強いていやだというと、きんこ棒に手がかかりそうです。龍王は、あわてて、

「では、弟の所をきいてみてあげましょう。」といって、どらをすって、鐘をならして、あいずしますと、西海龍王は西から、南海龍王は南から、北海龍王は北から、はるばるの浪路を、またたく間にくぐってやって來ました。話をきいて、いちばんげんきな南海龍王が、

「そのくそ仙人、つまみだせ、くせになるぞ。」と、いきまきましたが、老龍王は、ほかの二龍王とともども、

「そんなことをしても、つまりこちらがけがをするばかりだ。」といって、とめたので、ふしょうぶしょう、黄金づくりの鎖子甲、色糸で織った雲履、それと、鳳凰がつばさをひろげたかたちの紫金冠を、三龍王で、それぞれに出しあって、やっと悟空を送りだしました。

猿王は、さっそく、もらったばかりの紫金冠をかぶって、黄金づくりの甲をつけ、色糸

の雲履をはいて、意氣ようよう、
「おやかましゅう、あばよ。」と、いいすてて出て行きました。そのあとを見おくって、龍王たちが、くやしがることといってはありません。
「ひどい奴だ。いずれ天宮にうったえて、天誅をくわえてもらわねばならん。」
さて、花果山水簾洞では、大王のかえりがおそいといって、みんな首をながくしていますと、悟空が、金金と光りかがやきながら、とぼうもなく大きな、にょいきんこ棒をかついでかえってきました。手下の小猿どもが、きゃっ、きゃっとさわいで、出むかえながら、大王のもってきた棒を、めずらしがって、みんなよってたかってもち上げようとしましたが、まるで、かとんぼが、大木をゆするようなものでした。
そのとき、猿王は、春の風になでまわされているという様子で、にんまりわらいながら、
「物にはなんでも主があるというが、この棒も、龍王の寶物藏のなかで、ただの大きな鉄のかたまりのまま、なん千年もねかされていたのが、おれのくるのを知って、このあいだから、さんらんと金色に光りだしたものだ。それ、そこに『如意金箍棒』と、一行にほりつけてあるだろう。おれがつかえば、これ、このとおり、意のままになる。」といって、棒を手のひらにつかんで、ひとこえ、

「小さくなれ。」とさけびました。棒は、みるみるちぢみだして、とうとう、ぬい針ほどちいさくなったとき、猿王は、それを、耳たぶのうしろにかくしました。
小猿どもはあきれて、
「大王、それでまた大きくなりますか。」といって、心配しますと、猿王はとくいで、針を耳たぶからとりだして、
「大きくなれ。」といいました。棒は二丈の長さになりました。
悟空は、うれしくてたまりません。それなり、洞門のそとにとびだして、こんどは、ひとこえ、
「ながくなれ。」とどなりました。とたんに、どうでしょう、悟空の四尺に足らないからだが、きんこ棒といっしょに、ずんずんのびて、いったいなん千丈あるのか、あたまに山をのせ、腰に峯をしょって、目からは、いなづまが走り、口は血の池をたたえたような、すごい巨びとになりました。きんこ棒のあたまは、大空のてっぺんの三十三天につかえ、さきは、大地獄のどん底にまでとどきました。
七十二洞の妖王どもは、いまさらふるえおののいて、あらためて、水簾洞にうかがって、大王を拜したてまつり、ひとつ声に、万歳をとなえたことでした。

お猿の壽命のながいわけ

こうして、だんだん、水簾洞のいせいがさかんになるにつれて、つきあいもひろくなり、用事もおおくなったので、猿王は、これまでたびたび智恵ぶくろをかしてくれた、れいの尻やけ猿と背長猿おのおのふたり、あわせて四にんの年より猿を、あらためて將軍にとり立てて、四健將と名づけ、手下の小猿どもをとりしまらせ、自分は牛魔王、獼こう王をはじめ、六にんの魔王となかまで、あわせて七にん、義兄弟の約束をむすびますと、まいにちのようによりあつまっては、やしの酒、ぶどうの酒で、さかんなおさかもりをしたり、氣がむけば、きんと雲にのって、世界じゅう、四海千山とまわってあるいて、この天が下の英雄豪傑どもとまじわり、四大洲の名だかい神仙たちをたずねて、いよいよ不老長生の術をみがきました。

そこで、ある日のこと、いつものにぎやかなおさかもりのあとで、六魔王を、洞門の外まで送りだしてから、鉄橋のところで、風にふかれて酔いをさましているうち、猿王は、ついねむくなったので、ちかくの松の木のかげに、ごろりと横になりました。しばらく、とろ

ところとしたとおもうと、どこからか、役人のふうをした男がふたり、紙の札に、「孫悟空」とかいたものをみせながらやってきて、いきなり、縄で悟空の魂魄をからげて、うむをいわせずひきずって行こうとしました。なんだか分からないので、猿王もおとなしくひきずられて行くうち、大きな城に來ました。門に鉄の額がかかっていて、「幽冥界」と、三字ほってありました。

「なんだ、幽冥界といえば地の下のくらいところ、閻魔王のすまいじゃないか、三界五行おかまいなし、不老長生の道のおくにたっしたおれを、ばかばかしい、なんでこんな所につれてきたのか。」

猿王は、かっとなって、いきなり縄を切りほどくと、耳の中からきんこ棒を出して、さえるふたりの役人を、ただひと打ちに、たたき伏せました。そして、大きな声で、

「えんまはどこだ。話すことがある。」とわめきながら、鉄棒をふりまわしまわし、城の中にとびこんで行きました。牛頭馬頭の鬼たちは、おどろいて、

「大王、たいへんです、鬚つらのかみなりおやじが、あばれこんで來ました。」と、しらせますと、地獄に王様が、十人あるうち、十ばんめのこんりん王が、あわてて衣しょう冠をととのえて出てきて、悟空をむかえました。

「まず、おしずかになされい。して、大仙人のお名前は。」
悟空はむくれて、
「なんだ、名前も知らないで、なんだって、おれをひっぱった。」と、やりかえしました。
えんま王はこまって、
「たぶん、人ちがいでござろうて。」といって、ごまかしましたが、悟空はすかさず、
「じゃあ、えんま帳を出してみせろ。」と、せめ立てました。
そこで、悟空は森羅殿のまん中に、むんずと座をしめて、冥土の裁判役人たちの、かわるがわるもってくる壽命帳を、かたはしからめくってしらべてみました。まず人間の部をみましたが、かたちこそ人間に似ているものの、猿は、やはりその中にははいっていません。けもののようにかけ走るからといって、神馬のきりん王の支配をうけてもいないので、けものなかまでもありません。鳥のようにとびかける猿ですが、鳥の王の鳳凰のかんかつを、うけてもいないのです。猿の部だけが、つまり、べつになっていて、それをくると、ある、ある、その中の、魂一千五百五十号に、墨くろぐろと三字『孫悟空』と書かれていました。そして、『天産の石猿、壽三百四十二才にして、善く終る』としてあったのでございます。

悟空はそのとき、心の中で、
「おれは、いったい、いまいくつになるか、自分の年を知らないが、とにかく、これはこまる。」と、つぶやきながら、筆をとりよせますと、まず、くろぐろと自分の名前をぬり消しました。それからは、お猿なかまの名があると、なんでもかまわず棒をひいてしまったものです。
「さあすんだ、もうえんまどののごやっかいにはならないよ。」
悟空は、こういいすてて、きんこ棒をひきずり、ひきずり、さっさと幽冥界を出て行きました。えんまなかまは、こわいので、あとをも追わせず、のちになって、翠雲宮にございる地蔵菩薩をたずねてそうだんしたうえ、孫悟空地獄あらしのてんまつを、ちくいち、天宮へ奏聞におよんだしだいでした。
こちらは孫悟空、えんま城を出るとすぐ、道ばたのわらじに足をひっかけて、つまずいたとたんに目がさめました。すると、四人の大将はじめ、小猿たちがとりまいて、がやがやいっています。そこで、
「あれなりひと晩ねむりこけたあいだに、地獄へ行って、壽命帳の名前を消してきたよ。これからは、おまえたちもえんまによびだされる心配はないぞ。」といったので、みんな、

大王さまのおかげだといってよろこびました。山のお猿に、壽命のとても長いもののあるのは、まずこういういわれいんねんだということです。

ところで、下界の水簾洞で、悟空が、まだ友だちや手下のかれこれをあつめて、毎日毎夜、おいわいのおさかもりで有頂天になっているとき、天の神様の天宮では、海の底の四大龍王と、幽冥界のえんま王と地藏菩薩から、悟空らんぼうのしだいをうったえ、はやく天誅をくわえたまわんことを、といって來ているので、天の大神の玉帝は、またもや天宮の役人たちをあつめて、いったい、この猿王をどうしたものかと、大評定のさいちゅうであったのです。

さて、すったもんだぎろんの末に、太白金星老人のおだやかな意見がとおって、このたびはまず、かるがるしく天軍をうごかすことはひかえて、かのあばれ猿を天宮によびよせ、なにか役をさずけて足をとめた上、なお本性があらたまらぬようなら、そのとき、ちゅうりくをくわえてもおそくはなかろう、ということになったのです。

そこで、太白金星が、天のお使になって、水簾洞に下り、悟空をなだめて、天宮へつれだすことになったのでございます。

四　悟空おおいに天兵をうちやぶる

馬方大將

さて、悟空大王は、はるばる天宮から、玉帝のお召文をささげて、太白金星がむかえにきたと聞いて、それみろとばかり、大とくいで、

「おい、みんな、るすをたのむよ。」というなり、さっそくきんと雲にのって出かけました。いったいが、せっかちの上に、天人のなかま入りをするというのがうれしくてたまらず、雲足のおそい金星老人を、あとにのこして、かまわず、ひとり、さっさと天宮にのぼってみますと、お宮の正門の南天門に、增長天王が、戟や劔をきらめかした大力衛士を、おおぜいしたがえて、守っていて、

「やあ、あやしい奴がきた。」というなり、ばらばらと猿王をとりまきました。

それ、水簾洞の大王がおいでだと、旗や太鼓で、にぎやかに出むかえてもらえるものと

きめていた悟空大王、あてがはずれて、大むくれにむくれてしまいました。
「くそいまいましい金星じじいに、いっぱいはめられた。」
そこで、あわや、にょいきんこ棒をもちだして、むりにも天門をたたきやぶって、とおろうとするところへ、太白金星が、息せききっておいついてきて、
「大王、そうおこるものではない。玉帝のお召があっただけで、まだ正式には、天宮に籍を入れる手つづきがすんでいないのだから、門衛が知らずにとがめたのも、むりではないのです。」といいますと、悟空はなおとむくれて、
「籍だの手つづきだのと、めんどくさいなら、おれはもうかえるよ。」といって、すたすたおりかけます。金星は、あわててひきとめて、
「まあ、そう短氣をださないで、わしについて來なされよ。」といいいい、天門の前に立って、大きな声で、「天門の衛士たち、きかれよ。ただいま、玉帝のおおせをうけたまわって太白金星、下界の仙人を同道まかりとおる、開門。」とよぶと、門がさっとひらいて、衛士たちは、おくへ引き上げました。これで、猿王もきげんをなおして、金星のあとから、ちょこちょこついて、中へはいりますと、金銀のいらか、珠のうてな、さすがに天上のお宮だけに、目のくらむほどのきらきらしさでございます。

悟空は、あっといったなり、目をぱちくりさせながら、金星にひっぱられて、正殿の靈霄寶殿にすすみますと、金星は、うやうやしく朝礼の拜をおこなって、
「おおせをうけたまわって、下界の妖仙をひきつれました。」と、奏上します。玉帝は御簾ごしで、玉音ほがらかに、
「妖仙はなんじか。」といって、たずねられました。
悟空は礼もしず、きょとんとつっ立ったなりで、
「ああ、おれだよ。」といいました。
これには、殿上人の仙官たちが、あおくなって、「このいなか猿、礼をしらぬにも程がある」といきり立ちましたが、玉帝はかえって、
「下界の妖仙が、あらためて天人のなかま入するのだ、かまうな、かまうな。」となだめられました。そこで、天宮にとどめておくにしても、なにか役をつけなければなるまいが、なにがいいだろうということになりました。すると、おうまや番だけが空いているというので、玉帝は、
「では、かれに弼馬溫の職をさずけよ。」と、いわれました。
群臣たち、またもうやうやしく拜礼して、「洪大の聖恩を謝したてまつる」といって平伏

しました。そこで、悟空も、「ありがとう。」といって、ぽくんとおじぎしました。

弼馬溫（ひつばおん）といういかめしそうな役名（やくな）をもらって、なんのことかわからないながら、お役人のきる冠や服もきせてもらったので、悟空は大よろこび、その日からおうまやの番人になりました。草でも豆でも、氣前（きまえ）よくたくさんくわせるので、千匹の天馬はまるまると肥（こ）えて、悟空の顔をみると、げんきな声でいなないてみせました。

そんなことで、半月ほどしたのち、ある日、悟空は、部下のうまや役人やべっとうたちをあつめて、新任（しんにん）のおいわいのおさかもりをしました。みんな酔って、上きげんに笑いざめいているとき、悟空は、ふといいだしました。

「いつか、きいてみたいとおもっていたのだが、おれのさずかっている、こむづかしい弼馬溫（ひつばおん）って役は、いったい、なんだね。」といいました。

「さあ、なんでもありませんや。名のとおり、馬の世話役（せわやく）でさ。」と、下役どもが、声をそろえていいました。

「ふん、それで、位は正（しょう）なん位っていうのかい。」

「正（しょう）にも従（じゅう）にも、位なんかありゃしません。」

「すると、位より上にえらいんだな。」

「どういたして、てんで、位のなかにはいらない、下っぱの役ですよ。」
そういわれて、猿王おこるまいことか、
「畜生、花果山にいれば大王だ。それをむりにだましてつれてきて、馬方にしやがった。くそ、おれはかえるよ。」
いうがはやいか、悟空は、机をけとばして、ついと外へ出て、れいの針を、耳の孔からとりだして、手ごろのにょい棒にすると、それをひきずって、すたこら天門から出て行ってしまいました。
さて、またたくまに、花果山にとんでかえると、るすに四大將が、小猿どもにさしずして、かわりに武藝の演習をやっていました。
「おい、いまかえったよ。」と、猿王が声をかけますと、みんな、いっせいに列をつくって出むかえて、
「大王、おかえんなさいまし。天宮では、さぞ栄花にくらして、たのしかったでしょう。」
といいました。悟空は、口をとがらせて、
「とんでもない。ひどいめにあったよ。玉帝のやつ、させるに事をかいて、おれに馬方の役をさせやがった。あんまりひとをつかう法をしらないから、たった半月で、おさらばをしてかえってきた。」
「たった半月ですって、十年にもなりますよ。なにしろ天上の一日は、下界の一年にあたりますからね。」
そういわれて、
「なんだ、十年もむだ奉公したのか。いまいましい。」と、悟空は、よけいくやしがりました。それを手下は、なぐさめて、
「もうそんな所へ行かなくても、いつまでも水簾洞の大王で、たのしくおくらしなさい。」
といって、また昔のとおり、にぎやかなおさかもりがはじまりました。そのさわぎのなかに、ひとりの猿が、
「大王、ご門のそとに、ふたり、一本角の鬼王がたずねてきて、お目にかかりたいといっています。」としらせてきました。
花果山のあるじが、天官の栄冠をいだいて、きょうかえってきたときいて、この山に住む鬼王が、おいわいにやってきたのです。
鬼王たちは、悟空と親分子分の杯をかわし、あらためて悟空大王の先鋒大將ににんめいされることになりましたが、大王が、天宮でひどい待遇をうけた話をきくと、ふんがい

して、こういいました。
「神通自在な大王が、ひとの馬方などをつとめてどうするのです。ひとつ、玉帝のむこうをはって、天の大神と肩をならべるといういみで、天と同等な、齊天大聖とお名のりなさい。」とすすめました。悟空はよろこんで、
「ほう、齊天大聖か、これはいい、いい、いい。」とさけびつづけました。
そこで、その日からさっそく、「齊天大聖」と、四字、大きくかいた旗を、水簾洞の上に立てて、大王というかわりに、みんなにも齊天大聖とよばせることにしたのでございます。

那吒太子と孫悟空

ところで、天宮では、悟空が役をほうりだし、天門をとびだして、下界にかえってしまったというので、さわぎになりました。それで、このまま捨てておいて、あのわる猿に、またもやあばれだされてはたまらない。勢のつかぬうちに、はやく攻めほろぼせというので、托塔李天王を降魔大元帥におし立て、天王の三ばん息子の那吒太子が、先手の巨霊神、

後詰の魚肚將以下天の兵隊をひきいて、隊伍をととのえ、旗と太鼓で、南天門をうち出でることになりました。
さて、花果山に來て、山の平場に陣をかまえ、まず巨霊神をやって、敵陣の様子をうかがわせますと、水簾洞のそとで、小猿のなかまに、山のおおかみや熊のばけ王がまじって、わんわんおんおんいいながら、劔や戟をまわしていました。
巨霊神は、そのとき大きな声でどなりました。
「けだものども、はやく馬方の弼馬溫にいえ。玉帝のみことのりをこうむり、天兵下って、なんじをとらえる。さっそくにこうさんすれば、手下の小妖どものいのちは、たすけてつかわすとな。」
小猿どもは、あわててかけだして行って、
「たいへんです、たいへんです。」とさけびました。
猿王は、しらせをきいて、
「よし、うわぎをとってこい。」というなり、龍宮から分どってきた、金のかぶと、金のよろいに、雲をあるくくつをはきますと、にょいきんこ棒を、りゅうりゅうとしごいて、さあっと洞門のそとへとびだしました。

悟空が出て來たとみると、巨靈神はいいました。
「このわる猿、おれを知ってるだろうな。」
「ふん、そんなくそ天神、みたこともないな。」と、猿王は、鼻であしらいました。
「このうそつき猿、知らないことがあるか。托塔大元帥の先鋒をうけたまわる巨靈天將だ。玉帝のお旨をかしこみ、すぐと冠も裝束もぬいで、『どうぞおゆるし下さい。』といえば、手下のいのちはたすけてやる。ひと言でも否をいったら、なんじ、こなみじんにたたきふせるから、そうおもえ。」
巨靈神のことばを、みなまできかず、猿王はまっ赤になりました。
「このくそ天神、大口をほざくな。この棒でひと打ち、ころりとやるのはなんでもないが、それでは、かんじんむこうに知らせるものがなくなる。はやくにげかえって、玉帝のおやじにいえ、ひとを見そこなうなってな。それから、なんでも、おれに天人のなかま入りさせたいというなら、それ、あすこの旗に出ている、あのとおりの名号をたてまつるなら、おれはおとなしくなって、天宮のお役人になってやって、世間もしずかになるだろうってな。それをぐずぐずいうようなら、いつでも天上御殿に打ってのぼる。するとおやじも、ゆっくり玉の牀にねむりこけては、いられなくなろうぜ。」

そのとき巨靈神が、この猿なにをいうのかと、おもいながら、ふと旗の文字を見ますと、「齊天大聖」と四字、くろぐろとかいてありました。そこで、わざとせせらわらってみせて、
「このわる猿、よくもふざけたことを書いた。なんでも齊天大聖と名前をよんでもらいたけりゃ、さきにまず、この斧にいってもらえ。」というなり、宣花斧をふるって、切ってかりました。それを、猿王はにょい棒のさきで、はっしとうけとめました。そこで、しばらく斧と棒がせりあったあと、しゃらめんどうなとばかり、猿王のうちおろすにょい棒のいきおいで、天將の斧は、まっぷたつに折れてしまいました。猿王はせせらわらいながら、
「このやくざ野郎、たすけてやる。はやく行ってしらせてこい。」といいますと、巨靈神はあたふた逃げかえって、
「馬方め、おもいのほか神通広大で、ついまけました。」といって、あたまをたたきました。
李天王は腹を立てて、
「このよわ蟲、斬ってしまえ。」といきました。すると、那吒太子がそばでとめて、
「まあ、しばらく待っておやんなさい。ひとつ、わたしが行って、かれの手なみをみてきますから。」といって、かぶとの緒をしめなおすと、陣をとびだしました。

行ってみると、悟空は、ちょうど陣をひいてかえりかけたところでしたが、那吒がいきおいこんでくるのをみて、

「ほう、どこの小せがれだ。ごそごそ、なにをしにやって來たのだ。」といいました。那吒はたけって、

「なにをこのわる猿、おれを知らないか。托塔天王の三太子の那吒だ。玉帝のお旨をうけて、きさまをつかまえに來たのだぞ。」といいました。

悟空は、からからとわらいました。

「はっは、みそっ歯もぬけかわらず、うぶ毛も生えかわらないくせに、えらそうな口をききなさんな。まあ、いのちはあずけておくから、あの旗の上に、なんとかいてあるか、よくみて、玉帝のおやじに、そういうがいい。」

那吒は「齊天大聖」の四字を、よこ目でみながら、

「このばけ猿、だいそれたりっぱな名を名のりおって、いったい、どれほどの神通力があるというのだ。一本、おれの劔をくらえ。」といいました。ところが、悟空は、

「まあ、どこからでもついて來てごらん。おれは手をださないからな。」といって、両手をぶらさげてみせます。那吒は、くやしがって大喝一声、

「かわれ。」といいますと、あたま三つにうで六本、すさまじい形相にかわって、六本の手に一本づつ、斬妖劔、砍妖刀という二本の刀、縛妖索のなわに降妖杵のきね棒、綉毬兒の弾丸、火輪兒の火なわをもって、むかってきました。それには、悟空もすこしおどろいて、

「おや、この小僧、おつなまねをしやがる。なにをなまいきな、よし、おれさまの神通力をみせてやる。」といって、まけずに大喝一声、

「かわれ。」とやりますと、これもやはりあたま三つにうで六本になって、おなじく六本の手にきんこ棒を一本づつもって、なんの負けるものかと、火花をちらしてわたりあいます。それこそ山もゆらぎ地もふるうすさまじさで、たがいに千変万化の秘術をつくし、一上一下虚虚実実というしだいで、三十たびにわたってたたかううち、もともと、手ばしこく、目さきのはやいがとくいな悟空、一本の身の毛をぬいて、もうひとりの悟空を、正面で那吒とうち合いさせ、本身はそっとうしろにまわって、にょい棒でひとうち、太子の左の肩へ、はっしとうちおろしました。ふとその音をききつけて、太子がからだをかわすまもなく、したたかくびのつけねをやられて、太子は、痛みにこらえきれず、得物をおさめて、これもほうほう、本陣へとにげかえったのでございます。

李天王は、上から、わが子の形勢あやうしとみて、助でっぽうを出そうとおもっていますと、もうさっそく、やぶれてかえってきたので、あおくなりました。

「奴め、こんなに神通があっては、いったいどうして勝つか。」

そこで、太子は、悟空が、齊天大聖の旗をおし立て、この名号を、あらためて玉帝からさずかるなら、おとなしくしてやるといって、いばっていることを話しますと、李天王も、

「では、そのおもむきを申しあげて、玉帝のおぼしめしをうかがおう。」といって、太子の傷をいたわりいたわり、ひとまず天兵をまとめて、引き上げました。

さて、こちらの水簾洞では、れいの七十二洞の妖王や義兄弟の六魔王たちが、のこらずうちそろって、勝ちいくさのおいわいにやってきて、また、のめやうたえの大さわぎになりました。そこで、猿王は、

「さあ、きょうからは、天下はれての齊天大聖だ。兄弟、おまえたちも大聖と名のれよ。」といいますと、牛魔王がまっ先に、

「よし、おれは平天大聖と、名のろう。」といいました。

「では、おれは通風大聖だ。」と、獼こう王がいいました。

つづいて、ほかの四魔王も、それぞれなにな大聖ととなえることになり、七大聖は、

ここにかさねて、兄弟のちかいをかためました。

齊天大聖

「さて、天上の御殿靈霄宝殿では、玉帝をはじめ群臣いちどう、にげかえった敗軍の大將をかこんで、この上は、わぼくするか、もっと天兵の数をましてたたかうか、評議まちまちできません。そこへ、れいの太白金星が出てきて、

「あのばけ猿、なんと申しても本性たがわず、口でえらそうなことをいうだけで、ものの よしあしのわけは、分からないやつでございます。またまたいくさをしかけて、むだに天兵をそこねますよりは、齊天大聖でもなんでも、かれののぞむままに名ばかりの位をあたえて招きよせ、無役のまま、ただなんとなく、天上におとめおきになるのが、おだやかかとぞんじます。」といったので、こんどもそれにきまって、またまた金星が、玉帝のお使に立つことになりました。

孫悟空はこのとき、まだ七十二妖王、六魔王たち、一門けんぞくにとりかこまれて、宴会のさい中でしたが、太白金星が來たときいて、こんどこそいよいよ齊天大聖だ、とよ

ろこんでむかえ入れました。するとはたして、そのとおりのありがたい玉帝のお旨だというので、さっそく、みんなにわかれを告げると、いそいそ金星とつれ立って、天へのぼって行きました。

天宮では、玉帝から、あらためて、孫悟空を齊天大聖のこの上ない位にのぼせるというおことばがあって、そのため、齊天大聖府という役所が、蟠桃園のちかくにたてられ、安静司、寧神司という、その下の役所が、ふたつまでもできて、幾人もの役人が、齊天大聖の世話をすることになったのでございます。

悟空は、そこで大きにまんぞくして、それからは、まいにち、齊天大聖府に、ただごろごろ、役人たちをあつめてのみくいするほか、用のないからだをもてあますことになりました。

五　仙人の桃

桃ぬすびと

さて、齊天大聖と、名だけはいかめしく名のってみたものの、天人なかまの作法はさらにわかりません、どこまでも野猿でいなか猿の悟空でした。

いったい、天宮には、玉清観、上清観、太清観と、三つに分かれた、仙人修行のいわば大学院のようなものがあって、元始天尊、太上道君、太上老君という、仙人の大祖師が、三人そこにいて、これが、仙人のこらずの王様でした。そして、天宮のあるじの玉帝におとらず、うやまいたっとばれていました。けれど、悟空はきがるに、このひとたちまでも「おじいさん」とよんですませます。それでも玉帝だけは、みんなが「へいか、へいか」とよぶので、それがあだ名だとおもって「へいか、へいか」とよんでいました。そのほかの、九曜星とか、二十八宿とかいわれる星の親方、五方將とか、四大天王とかいう天將た

ち、いわば天宮のお公卿さまか、將軍にあたるひとたちも、悟空にあうと、かんたんに、君、ぼくであしらわれるしまつです。そこで、まいにち、することがなくて、たいくつしますと、いつでも、ふらりときんと雲にとびのるなり、天宮せましとのしあるいて、相手かまわず、友だちにしてあそびまわります。これがまず、齊天大聖孫悟空どのの日課でした。ところで、これが天人たちなかまに大恐慌をまきおこしました。時かまわずにどこにでもあらわれ、そこらをあらしまわるので、いまになにか事をしでかさぬうち、このやっかいなお客を封じこむ手はないかと、みんなよって首をひねりました。

「やはり、かれにきまったお役をあてがって、すこしおちつかせるのがよろしゅうございましょう。」

このうったえを、玉帝が、おとりあげになって、さっそく齊天大聖を召されました。

悟空は、玉帝のお召しだときいて、大にこにこでやってきました。

「へいか、なにかごほうびがもらえるので。」

「いや、べつだん、ほうびをあげるというわけではないが、おまえも、ひまでこまっているようだから、ひとつ、蟠桃園の桃畑をあずかってもらうことにしよう。いつでも氣のむいたとき行ってよろしい。」と、玉帝はいわれました。

悟空は、そのとき、「ありがとう」とだけいって、ぽこんとおじぎひとつすると、もうさっさと蟠桃園へ出かけて行きました。そして、そこの役人たちに、

「おい、玉帝のいいつけで、きょうからおれがあずかることになったからな。」といって、土地の神をはじめ、桃園の世話をする園丁たちに案内させて、さっそく、園の中を見てまわりました。

なるほど、のこらずの仙女の女王とも、大母ともあおがれる西王母が、手ずから植えたというだけあって、みごとな桃の実が、半分赤くじゅしかけながら、るいるいとなっていました。悟空は、みるみる、よだれのたれそうなのを、むりにのみこんで、土地の神に、

「いったい、どのくらい桃の木の数があるのかい。」といって、たずねました。

「みなで三千六百株、そのうち、前どおりの千二百株は、花もこまかいし、実も大きくはありませんが、それでも、三千年にいちどなるだけで、それをたべれば、仙人のからだになって、しぜんと身がかるくなります。中の千二百株には、ずっとおいしい実がなって、これは六千年にいちど、そのかわりそれをたべれば空もとべるし、いつまでもなが生きして、年をとるということがありません。さて、うしろの千二百株になると、実がもう、うつくしい紫の斑いりで、中の核はあさぎ色しています。なにしろ九千年にいちどなるとい

う、めずらしいもので、それをひとつたべたものは、それこそ天地と壽命をくらべて、日や月とおなじ年になるといいます。」

悟空はきくうち、ぞくぞくうれしくなってきました。そこで、その日は、神妙に見分だけすませて、役所にかえって來ましたが、それからは、三日にあげず桃園を見てあるくのがたのしみで、もう友だち遊びもしず、出あるくこともなくなったのでございます。

するうち、悟空は、どうにも仙人の桃がたべたくて、がまんがならなくなりました。そこで、ある日、つきまとってくる下役人どもに、用をいいつけて、むりによそへ出しておいて、冠も服もぬぎすてると、ひとりこそこそと、木の上にはい上がりました。そして九千年の桃の実が、なかまですきとおって、おいしそうにじゅくしているところを、したたかかじりあらしたのち、またそっとおりて、口をふいてすましていました。

これに味をしめて、それからは、間さえあると、おなじ手をつかって、ひとしれず桃のぬすみぐいをたのしんでいたのでございます。

西王母のお使仙女

ところで、ことしは、九千年にいちどの桃の実がなったというので、西王母の住まわれる宝閣の瑤池、やさしくいいますと、たから御殿の玉池というところでは、蟠桃勝会と名をつけて、天の四方に住まわれる佛さま、菩薩さまと、仙人のお客さまをよんで、さかんな桃の宴をもよおされることになりました。そこで、紅衣、青衣、白衣、黒衣、紫衣、黄衣、緑衣と、七いろのきものを着た仙女たちに、花籠をひとつづつもたせて、蟠桃園の桃の実をとりに出されました。

でも、ことしは、いつもと勝手がちがって、蟠桃園は、齊天大聖があずかっているというので、七人のお使仙女は、番人の役人たちについて、大聖がいつもたいくつしてねむっているという、園の中のはなれ家に、行ってみましたが、姿が見えません。ではと、園の中じゅうたずねまわってみましたが、やはり分かりません。分からないはずです。悟空大聖、きょうも、れいの九千年の桃の木にのぼって、さんざんたべあきたのち、二寸ばかりの小人にばけて、それなり木の上でねむりこんでいたのでございます。

「では、王母さまのご用がおくれるから、かまわずもいで行きますよ。大聖に、あとでよろしくいって下さい。」といって、七仙女は、まず前どおりの木から三籃、中どおりの木から三籃、もいだのち、さいごに、うしろの、奥どおりの木に行ってみますと、これはした

り、九千年の桃は、きれいにもって行かれていて、まだ青いのが五つ六つ、ちらほら、まばらな枝のあいだに、のこってみえるだけです。しかたがないので、そのなかでいくらか赤らんでいるのをひとつみつけて、枝をゆすぶるひょうしに、あいにく、その枝にのっていた大聖をゆりおこしました。

悟空は、びっくり目をさますと、たちまち、本相をあらわして、さっそくに、耳の中のにょい棒をだして、ひとふりふって、ながくしながら、大きな声で、

「このくそばけ女ども、よくもだいたんに、うちの桃をぬすみにうせたな。」と、どなったものです。

この声に、仙女たちはおびえて、

「大聖、おゆるしください。西王母さまが、桃の宴会をなさるので、わたしたち、王母さまのおいいつけで、桃をもぎに來たのです。おことわりするひまがなくてすみません。」

と、ふるえふるえいいました。

桃の宴会ときいて、大聖きゅうに、にこにこ顔になりながら、

「ふん、して、その宴会によばれるお客さんは、たれたれだね。」とたずねました。

「それはもとからのしきたりで、西天の如來さま、南方観音菩薩さま、この天宮では、玉

帝さまはじめ、三清観のお三方は、いつもお客さまから、かけたことがございません。」と、仙女たちがこたえました。

「すると、おれは。おれは齊天大聖だが、その天帝なみのおれは、よばないのかい。」

「さあ、わたしたち、これまでのことしか知りません。こんどはどうですかしら。」

「よし、それなら、しばらく、そこにじっとしておいで。ちょっと行って、ようすをみてくる。」

こういうなり、呪文をとなえて、からだをうごかなくする定身の法をつかって、「とまれ、とまれ」といいますと、七色の衣の仙女たちは、きょとんと目をあけたまま、桃の木の下に立ちすくんで、動けなくなってしまいました。そのまに、悟空は、きんと雲をよんで、ふらりと蟠桃園をとびだしました。

仙人の靈酒　仙人の靈薬

すこし行くと、むこうから、色がわりの五色の雲を先に立てて、白い鶴にのってやってくる仙人があります。みると、それは赤脚大仙という、いつもはだしの仙人です。悟空は、

ふと、はかりごとをおもいついて、

「先生、どちらへ。」と、声をかけました。

「王母のお招きで、蟠桃勝会におもむくところじゃ。」と、赤脚大仙はこたえました。悟空はすかさず、

「先生、それでは、道がちがいますよ。じつはことしから、蟠桃勝会のお客さま方には、いちおう、天宮の通明殿で、玉帝が、みなさんのごあいさつをおうけになることになりました。それで、わたしのきんと雲が、いちばん早いというので、このとおり、お客さま方のお通り道をとびあるいて、一一しらせて上げているところです。」と、さもほんとうらしくいいました。

すると、まっ正直でひとのいい赤脚大仙は、それをほんとうだと、おもって、

「いつも、ごあいさつは瑤池のほうでおうけになるのでな。こんどもそうおもうていましたわい。」といって、すごすご通明殿のほうへ引っかえして行かれました。

そのうしろ姿をみおくって、悟空は「してやったり」とほくそ笑みながら、ひとゆすりからだをゆすると、赤脚大仙そっくりのようすになりました。そこで、すたこら、瑤池にある王母のお宮に行ってみますと、紫の雲赤い霞のたなびきわたるなかに、珠をちりばめた

宝閣がきらきら光って、仙人の霊酒やあまい漿液の水のかんばしいにおいが、ぷんぷんしてきます。悟空は、とめどなくよだれをながしながら、まず神通をつかって、「かわれ。」といいますと、ひとつかみの身の毛がなん十ぴきものねむり蟲になって、お給仕役の下っぱ仙人や、童子たちにとりついたので、みんな、玉のうつわや、金のさかずきをりょう手にささげたなり、こんこんと、ねむりこけてしまいました。そこで、悟空は、えんりょえしゃくもなく、奥ざしきにはいりこんで、皿や鉢に山ともった仙女宮のごちそうを、かたはしからひっつかんで、がつがつたべて、かめの中に、なみなみたたえたあまい仙人のお酒を、くみだして、がぶがぶのみました。

するうち、いったいお酒にはつよくないお猿のことです。すぐと、赤い顔をよけい火のように赤くして、西も東もわからないほど、したたか酔っぱらってしまったのでございます。

「いけない、いけない、お客のこないうち、はやくにげだして、うちでひと寝入りしようや。」

こう悟空はつぶやきながら、またふらりふらりとびだしました。ところが、さっそく道をまちがえて、齊天大聖府に來たつもりで、ふと上の額をみると、兜率天宮という四字が、

酔った眼にもぼんやり見えました。

「こりゃあいけない。三十三天のすてっぺん、太上老君どののござる、兜率天宮に來てしまった。ままよ、このついでに、いったい、どんなじいさんだか、老君どのの顔を、みて行ってやれ。」

こう、どきょうをきめて、中へはいってみますと、しんかんとして、人かげもありません。そのはずです、老君は、ちょうどこのとき、三階の高樓で、仙人たちをあつめて、ご法話のさい中であったのです。

そこで、よくみると、老君のお座のそばにおいてある丹爐から、ひとすじの、ほそい煙が立ちのぼっていて、なかで、火がとろとろもえていました。

「ははあ、不老長生の仙丹を、この火で煉るのだな。」

悟空は、ひとりしゃべりにしゃべりながら、そこに五つもころがっているひょうたんの口をあけてのぞいてみますと、煉り上がった金丹が、だいじそうにはいっていました。

「ほッほ、こりゃあ願ってもないけっこうなお薬だ。じいさん、おるすでしあわせ、さっそくいただきますよ。」と、悟空はいいながら、手のひらにうけて、まるで炒豆でもかじるように、ぽりぽり、ぽりぽりたべました。

するうち、仙人の霊薬のききめはてきめん、きれいに酔がさめました。さて、なにかがはっきりしてきますと、さすがの悟空、自分ながら、こんどはすこしやりすぎたとおもいました。

「いけない、いけない。おおしくじり。玉帝のおやじ、さぞびっくりするだろう、ぐずぐずすると、いのちがあぶない。ここで天宮にもおさらばして、また下界の王さまになるのがよさそうだ。」

悟空は、そこで、兜率天宮をまっしぐらにかけだし、西大門から、隠身の法をつかって、そっと天宮をぬけだしますと、またたくまに、花果山水簾洞にげかえりました。さて、れいの四健將をはじめ、手下の小猿どもにとりかこまれながら、天宮の話をひとくさりやりました。

「大聖、こんどはだいぶ居ごこちがよかったとみえて、ずいぶんゆっくりでしたね。」

「なあに、そんなにながくはなかったよ。せいぜい半年だ。」

「天上の一日は下界の一年、もう百年あまりおるすでしたよ。」と、こんどもまたいわれました。

そこで、またにぎやかなおいわいのおさかもりになりました。ところが、いちど西王母

のお宮の、あのとろんとあまい仙人酒の味をしめた悟空の口に、花果山の山の中の猿酒が、口にあうはずがありません。

「よし、待っていろ。長生不老の仙人酒を、おまえたちにも、口果報させてやる。」と、さりました。そして、両手両脇に、ひとつづつ、四つまで酒がめをかかえて、とくいらしくかえって來ました。給仕の仙人たちは、あれなりねむりこけていましたし、お客さまは、ましてひとりも來ていませんでした。

さて、仙人酒の会と名をつけて、悟空一門の大猿小猿、その晩ひと晩、たのしくわらいさざめいて明かしたことは、申すまでもありますまい。

天宮騒動

それにひきかえて、さんざん悟空に荒らされたあと、天宮の騒動といったらありません。七色衣の仙女は、みごと、だいじな仙人の桃をぬすまれたしだいをうったえます。蟠桃会の宴席が、むざんに食べあらされ、飲みあらされたしらせがきます。太上老君のたいせつ

な金丹は、きれいにぬすまれて、ひと粒もないといいます。そこへ、悟空にいっぱいくわされた、はだしの仙人の赤脚大仙があらわれて、いっさいがっさい、齊天大聖のわるあがきとわかりました。そこで、こんどこそ、もう太白金星のなまぬるい平和論はとおりません。

「かさねがさね天宮の平和をかきみだす兇賊、齊天大聖めを討ちほろぼせ。」

玉帝が、おごそかにのらせられます。「それ。」というので、四天王、それに前いちど出た李天王、那吒太子父子が総大将で、二十八宿、九曜星以下の星将軍たちのひきいる十万の天兵は、旗と太鼓とチャルメラで、どんどこ、ぷうひゃら、くりだしました。そこで、詩にもうたっているとおり、

天産の猿王、変化自在で、
丹をぬすみ、酒をぬすんで、山窩をたのしむ。
ついには、桃の宴会を、荒らしに荒らし、
十万の天兵、網と羅で追いまわす。

ことになったのでございます。

悟空奮戦してまず勝つ

さて、天軍は、下界におりますと、李天王がさしずして、まず天と地とのあいだに、十八段もかさねて、天の羅、地の網をかけました。大空と下界のあいだに、網と羅をいくえにも張りまわして、悟空が、たとえ、こま虫ほどの小虫にばけて這いだしても、のがさずこの羅と網に引っかけようというのです。これだけすると、先鋒の九曜悪星を先に立てて、ひしひしと水簾洞をとりかこみました。

洞門の外で、さわいで遊んでいた小猿どもは、このときはじめて、空がくらくなったので、氣がついてみますと、いつのまにか、花果山の山も谷も、天兵でいっぱいうずまっていたので、びっくりぎょうてん、かけこんで行って、

「大聖、えらいことになりましたぞ。水簾洞は四方八方、すきなくかこまれて、九人のすさまじい面がまえの星神が、大聖をつかまえに來た、とどなっています。」としらせました。

ところが、悟空は、あれなりすっかりとくいになって、まいにち、七十二妖王のけものたち、四健將の年寄猿をおあいてにお酒をのんで、天と地の間にたれひとり、手に合うも

のがないようにいばりかえっているところでした。ですから、小猿がなにをいって來ても、

「詩酒かつはからん今日の樂しみ、
功名問うことをやめよ、いく時にか成ると。」

お酒をのんで歌をうたって、きょうの一日たのしくくらせ、世間のことはなるままになれなどと、上きげんで太平樂をならべていたのです。

そのうち、敵はずんずんせまってきて、九曜星の神は、もう洞門をぶちやぶって、攻め入って來たと聞いて、やっと、悟空も正氣になりました。そこで、ひと声うおっとたけると、ながい二丈のきんこ棒をかついでとびだしました。そのときにはもう、七十二妖王、ふたりの一本角鬼王のともがら、九人の星神にたたき伏せられて、のこらず、とりこになっていたのです。

身方の旗色がふるわないとみると、悟空はおこって、半分にぶっていた精神がふるいおこり、たちまち火になってもえあがりました。九人の星神は、ひっしの棒勢に、ひとりひとりなぎたてられて、ほうほうのていでしりぞきました。二十八宿の星將も追いまくられ

ました。李天王、那吒太子父子も、前の敗戰の恥をそそぐのは、この時ばかりと、四大天王ともども、先頭に立って、しゃにむに悟空をとっておさえようとあせりましたが、あいてが手ごわいほど、こちらは百倍も、千倍も勇氣が加わります。とうとう、れいのからだを分ける、身外身の法までつかって、百人あまりの小悟空が、めいめい、きんこ棒をふるって、たたきまくるいきおいに、那吒はまずまけてひっこむと、天軍の足並がしだいにくずれだしました。そのうち、だんだん日はくれてくる、朝からまる一日、なん百どとない奮戰突擊で、おたがいにくたびれきっているので、ひとまず相引に引くことになりました。

悟空大聖、そこで、十万の天軍を、ただひとりであしらって、一歩もすすませなかったので、すっかり氣をよくしてしまいました。そして意氣ようよう引き上げますと、洞門のそとで、四健將をとりまいて、小猿どもがおいおい泣いています。それが悟空大將の元氣な姿をみるなり、うってかわって、みんなきゃっ、きゃっ、とわらいだしました。悟空が、

「泣いたりわらったり、なんのざまだ。」とどなりますと、猿どもは、

「きょうのいくさに、七十二妖王と一本角鬼王をとられて泣いたのです。大聖のかすり傷ひとつないぶじなお姿をまたみて、こんどはわらいたくなりました。」というのです。

「勝つも負けるも、いくさのならいさ。むかしから、一万ころせば、三千損するという。

おれたち猿のなかまに、ひとりもけがもないのに、なにをくよくよするやつがある。みんな心をあわせて、水簾洞を守れ、守れ。今夜ひと晩、ゆっくり休んで、げんきをとりかえしたら、あしたは、おもうぞんぶん神通をつかって、天兵のやつら、片ッぱしから追いまくるし、とられた身方はとりかえす。みんな安心して休め、休め。」

悟空が、こういってはげましますと、みんなまたきゃっ、きゃっとよろこんで、たれもぐっすりねむったことでした。

むこうはむこうで、四大天王はじめ天將たち、これもまけずに、妖王、鬼王の捕虜を引かせて、いくさの幸先をいわいました。そこで、この上にもきびしく天の羅地の網のかこみをかためて、あしたは、夜の明けるから、決戰の火ぶたを切ると、はり切りました。さてこの決戰、どう勝負がつくでしょうか。まさにこれは、

妖猿乱をおこして天地をおどろかすにより
網をしき羅をはって晝夜みまもる

というところ、くわしい話はこの次に。

六　悟空、二郎神の術くらべ

南海の観音菩薩

こに、南海普陀落伽山に住まわれる観音菩薩は、西王母のおまねきをうけたので、大弟子の惠岸行者をお供につれて、宝閣瑤池の蟠桃会にお出かけになりました。ところが來てみますと、饗宴の席は、むざんに荒らされていて、かんじんの王母はじめ仙女たちの姿はみえず、これもお客によばれて來た天上の仙人が、七八人、手もちなく、ただうろうろしながら、なにかぶつくさいいあっているだけで、さっぱりわかりません。そこで、菩薩も、とにかく玉帝におめにかかって、ようすをきくことにして、お客の仙人たちをひきつれ、通明殿まで行ってごらんになると、王母も、太上老君も、いっしょにそこに來ておられて、めちゃめちゃになったきょうの蟠桃会の跡しまつの相談さいちゅうです。

そこで、菩薩は、天宮騒動の一伍一什から、張本人のいたずらもの孫悟空のおいたち來歴

まで、玉帝からくわしい話をおききになりました。でも十万もの天軍が出征したあとのたよりは、まだまるでわかっていないというのです。菩薩はそのとき、惠岸行者をよばれて、
「おまえ、さっそく、花果山に下って、勝負のようすを見とどけておいで。ばあいによっては、ひとはたらき、かせいのいくさをしてくるがいい。」といわれました。
行者は、もともと、李天王の二ばん息子で、那吒太子には兄さんです。菩薩のお弟子になって、佛の道にはいってはいるものの、武藝の腕にはおぼえがあります。妖魔降伏の劔のかわりに、坊さんのつく鉄棒を得物にして、きりりと身づくろいしますと、勇んで花果山へととびくだりました。
さて、水簾洞をかこんで、すきまなく十重二十重とかけわたした天の羅地の網を、
「李天王には二太子の木叉、南海観音の大弟子、惠岸、いくさのようすをたずねにまかり下りました。」と名のって、あけてもらいますと、父の李天王、弟の那吒、父子きょうだい、三つ鼎になって話しあいました。それで、きのうの一勝一敗の話、それがまだすまないうち、もう陣門のそとでは、
「悟空大聖、手下をひきつれて、ただいま、打って出ました。」と、よぶ声がしました。
そのとき、惠岸行者の木叉は、

「父上、菩薩のおことばもありましたから、かやつ、どれほどの手なみか、ひとつ、わたしにためさせてみてください。」といいますと、父の天王も、
「よし、菩薩のおそばで修行したおかげで、すこしは神通もそなわったろう。やってみるがいい。」といいました。
木叉太子は、りゅうりゅうと鉄の棒をしごきながら、まず、
「齊天大聖と名のる奴はどれだ。出てこい。」とどなります。
「大きな口をたたきなさんな。観音の弟子坊主が、なんとおもってとびだしてきた。老孫の一棒をくらえ。」と、悟空がやりかえします。
そこで、鉄の棒ときんこ棒のうちあいになりましたが、五六十合たたかううち、木叉惠岸、腕がしたたかしびれて、棒がつかえなくなりました。はあすう、息をきらして逃げかえりますと、四天王も、李天王も、いまさらのようにあおくなりました。それで、
「この上は、ありのままを申しあげて、もっと加勢をくりだしていただくほかなかろう。」ということになり、惠岸行者に大力鬼王をつけて、天宮にかえらせたのでございます。
いくさのようすが、だんだんわるくなるというので、玉帝は、眉をひそめました。する

「ご安心なさい。まちがいなくこの猿めをとらえるひとがありますよ。」といわれました。
「それはたれですか。」と、玉帝はききました。
「たれでもない、すなわちあなたの甥御の顯聖二郎眞君です。下界に下って、灌洲の灌江口に住んでおられるが、いつぞや六人ばけもののなかまをたいじて、大功をあげられたこともあります。梅山六人兄弟と名のる勇士とは、義兄弟のちかいをしていて、部下には一千二百人もの野の神をひきいてもいられる。あの広大な神通力で、わる猿めをとりひしぐことはまちがいないが、ただへいかのおことばでないと、あの人は動きだすまいとおもいますね。」
玉帝はよろこんで、すぐと詔書をしたため、大力鬼王にさずけて、灌江口にむかわせました。おじさまの玉帝からのお召というので、眞君もいやとはいえません。さっそく六人兄弟の勇士を身方にたのみ、一千二百人の野の神に、おびただしい鷹と犬とをつれさせ、たちまちひとふき、つむじ風をまきおこしたとみると、どっと花果山におしよせました。

変相くらべ

これでうちつづく敗戰に氣をくさらしていた天軍の陣営は、きゅうに色めきたちました。四天王、李天王は、顯聖眞君と梅山の六人兄弟をむかえて、すぐと、いくさのそうだんです。そのとき、二郎眞君はいいました。
「空の上からかけた天の羅、地の網ははずして、天兵はただ四方からきびしくかこんでいるだけでよろしい。そのあとの、いくさのかけひきは、ひとつ、わたしにまかせてください。まん一、わたしがまけ色になっても、みなさん手を動かさないでください。いっしょにきた六人兄弟が助けてくれます。わたしが勝てば、ばけ猿をとっておさえるしごとは、やはり六人兄弟にまかせてください。ただ托塔天王にねがいますが、空の上から、照妖鏡で照らして、ばけものを、化けられなくしていてもらいたいのです。かやつ、まけると、きっとなにかに化けて、にげ出すでしょうから、どこまでも行くえをつきとめなくてはなりません。」
そこで、そうだんがきまると、四天王は東西南北をかためるだけで、そのあいだに列を正して、天兵をならばせました。そのなかで、二郎眞君は、六人兄弟を右ひだりにしたがえ、野の神に鷹をもたせ、犬をひかせて、隊伍をととのえ、ただひとといきに、敵のとりでを抜くいきおいで、水簾洞せましとのしかかりました。

「神將きたる。」

しらせをきいて、孫悟空は、きゃっ、きゃっと、うれしそうに高わらいしながら、紫金冠のかぶとに、黄金づくりのよろい、きんこ棒をかかえてとびだしてきました。あいてはとみますと、さすがは顯聖二郎の神、いちだんと神神しい霊氣を、そこらいちめんただよわして、あっぱれさわやかな大神將の骨がらです。それにはへいきで、悟空はいいました。

「また性こりもなく出て來たのは、どこの小せがれだ。」

「こやつ眼があっても、目の玉がないのか。われをたれとおもう。玉帝の甥、天のみかどのお墨つきをいただいて、昭恵霊顯王二郎と名のる。ただいまお旨をうけて、天宮をさわがす馬方猿めを、つかまえにきたのだ。いのち知らずとは、きさまのことだ。」

二郎神は、まけずにどなりつけました。きいて、悟空はうなずきながら、いいました。

「そういえば、玉帝の妹ッ子が、下界に下って、人間の男の子を生んだときいた。おので山を切りわる力があるという話だが、それがおまえかい。べつだん恩もうらみもない。おれさまの棒をくらって、いのちをなくすのもかわいそうだ。さっさとかえって、四大天王をかわりによこせ。」

「このわる猿、よけいなことをいうな。わが一劔をくらえ。」

218245

そこで二郎神とくいの三尖両刃の神劔と、悟空大聖ごのみの、長さ二丈の如意きんこ棒と、空の上で打ちつ打たれつまじわって、三百なん合、いつ果てるとも知らずにたたかいつづけました。するうち、神將が、じれったくなったか、からだ一杯精神をこめて、ぶるんとひとゆすり、ゆすりますと、その高さ一万丈、それこそ中國一の泰山の、しかも頂上にそそりたつ峯かともまがう巨神になって、もえる杉の木のように、まっ赤な髪の毛が、一本一本、天にむかってつッ立ちました。すると悟空大聖もまけてはいずに、あいてをいちだん上こす超大巨人、まさに世界一たかいこんろん山の上に、空をささえて立つ林かとばかり、天と地のあいだに立ちふさがります。これには敵も身方もあきれて、ただぼうっとお酒に酔ったようになっていました。すると、このときとばかり、眞君おそばの梅山六人兄弟、一千二百の野の神のあずかる、一千二百の鷹と犬を、水簾洞にむけて、いちどにときはなちました。そのあとからは、いっせいに大弓、石弓の矢と石が、ぶんぶんとびました。そのなかに、鷹と犬は、四方八方かけまわって、大猿小猿のむれを追っかけ追いまわします。やがて、三千にあまる齊天大聖軍の猿兵、半分は、うたれ、生けどられ、半分は、猫にねぐらをおそわれた寢鳥のように、ばらばらにげて、洞の奥ふかくかくれひそんでしまいました。あとには、もうそろそろうすれかけた夕日のなかに、あわれ孫悟空ただ

ひとりの、世にもあやしくふしぎなばけもの姿をのこすだけでした。
こうなると、さすがの悟空も、あわてだしました。そこで、かりの姿を本身にかえし、にょい棒をひきずって、洞の中へかえろうとしますと、梅山の六勇士が先にまわって、洞門をかため、
「どっこい、わる猿、どこへにげる。」と、おしもどします。そこでこまって、いそいで棒を耳の中にたたみこむと、一わの小雀になって、梢の上にまいのぼりました。あとには六勇士が、
「ばけ猿、どこへにげた、どこへにげた。」と、むなしく空をみあげて、わあわあいっています。
そこへ、二郎眞君が、のっし、のっしやってきて、
「兄弟、どうした。やつをどこへにがしたか。」とききました。
「たったいま、ここでとりこめたとおもうと、みえなくなりました。」
「ふん。」といいながら、眞君が、大目玉をぎょろりとむいてみまわしますと、たちまち、ぷうとふきだしました。
「なんだ、あいつ、あんな所にいるわい。」

と、こういうなり、一わのすずめ鷹になって雀の上にまいおります。すずめ鷹はあわてて、大きな鵜になって、とおく海のほうへとびます。二郎神將すぐとみつけて、大海鶴になって追います。大聖そこでまた、羽ばたきひとつ、小魚にばけて谷川の底にしずみますと、二郎神將はまた魚鷹になって、水の上をとびまわり、悟空魚のあたまをだすのを、いまかと待っています。大聖は、水の下でおよぎながら、上をみますと、鳥がとんでいました。ただの青鷹にしては毛が青くないし、鷺かとおもうと、冠毛がなく、こうのとりだとすると、足が赤くないから、てっきり、二郎のばけたやつだ、と、そうおもって、つういと水をきってはしりだしました。それを二郎神將がみつけて、これも、
「へんなさかなだな。さてはお猿のばけものか。」と、いきなり追って行って、くちばしでつきます。大聖そこでおどろいて、水蛇になり、水をとびだして、するすると、草のなかにもぐりこみます。眞君、「やったな。」というなり、丹頂の胡麻鶴になり、とぼうもなくながいくちばしをのばして、蛇のしっぽをはさもうとしますと、はさまれては一大事と、蛇はのがんになって、すまして、みぎわのあしの中に立っていました。
「野猿め、いやな鳥になりおった。」と、眞君は、にがわらいして本身にかえり、はじき弓に石をのせて、ばちんとやりますと、鳥はかかとをやられたらしく、よたよたにげ出して、

崖の下にころげこみました。
「はて、たしかに手ごたえがあったが、やつ、どこへにげたろう。」とおもって、眞君があとを追うと、崖の下に、ついみなれないちいさな廟が立っています。眞君、こんどは、からからわらいだしました。
「なんだい、このぶざまなほこらは。門が口で、とびらが牙だ。しっぽのしまつにこまって、うしろに一本、にょきんと旗がおっ立っている。舌を出して、ご本尊にばけさせているが、そのりょうわきの小窓は、やつのふたつの目にちがいない。そこからまずつッつきこわして、門とびらをけとばしてやろう。」
悟空は、きくなりびっくりして、たちまち、ほこらをたたんで、つういと空の中に消えました。しまったとおもって、すぐ眞君はおいかけましたが、こんどは、どうしてもみつかりません。から手で洞まで引き上げますと、六人兄弟が出むかえて、
「どうです、猿めはつかまりましたか」とたずねます。
「ほこらに化けたのまでは知っているのだが、それからふいとみえなくなったよ。」
そこで、もうちいど空の上にあがってみますと、李天王が那吒をあいてに、しきりと照妖鏡で照らしていますが、やはりなんにも目にはいらないようです。そこへ眞君がたずね

て來たので、もういちど鏡を四方にむけますと、李天王はふとわらいだしました。
「はっはっは。眞君、眞君、はやくおかえんなさい。猿め、いつのまにか、灌江口のあなたのおうちに行っていますよ。」

大聖ついにとらわれる

そこで、眞君はひらり身をひるがえして、灌江口へかえって行ってみますと、なるほど、奥に自分とそっくりおなじ顔かたちのにせ眞君が、ちゃんとすわって、るすの役人どもを、あごでさしずしています。あきれていきなりとびこむと、やあ、ほんものがやって來たというなり、大聖は、また本身にかえりました。またもや三尖両刃の劔と、にょいきんこ棒のうちあいになって、両雄たがいに負けじと、空の上で火花をちらしながら、ただもう、こんこん、もうもう、雲けむりを立てて、花果山までたたかって來ました。四大天王はおどろいて、まわりをきびしくとりかこませます。六人兄弟は、刄先をそろえて、眞君をまもりながら、助太刀にとび出す折をねらっています。
ところで、天宮の上では、眞君が六人兄弟そのほかをしたがえて、すぐ花果山にむかっ

た、という大力鬼王のへんじをきいたなりで、下界そののちのようすを知らないので、玉帝はじめ、観音菩薩、太上老君、西王母以下お客の仙人たちのこらずぞろぞろつながって、南の大門まで出てみました。すると、ちょうど、李天王が、照妖鏡をかざしている下で、眞君と六勇士が、大聖ひとりを中にとりこめて、それこそ血みどろなたたかいのまっさい中です。

そのとき、観音菩薩は、いささかとくいらしく、太上老君をふりかえって、ほほえみながら、

「ごらんなさい、さすがに二郎神、もうひといきで、かれをとりこにするところまで漕ぎつけましたぞ。」といわれました。

そこで、菩薩は、手に楊柳の枝を入れてもった淨瓶を、悟空めがけてなげて、だいぶ手筋のみだれて來た猿王に、とどめをさそうとされました。老君は、それをみると、

「損じやすいうつわです。かれの鉄棒にあたって、きずついては惜しいものだ。わたしにいいものがあります。」といわれて、袖をまくって、左の肩の所から、銀のたまを出されました。

「これは金剛琢と申して、なが年きたえて、水にも火にも燒けず、変化自在のたからです。

これで打たれれば、かれも、ふたたび通力を用いるところがなくなります。」
老君はこういって、花果山まで下られました。そして、悟空が七人をあいてに苦戦しているま上に來て、金剛琢をおとすと、ねらいはあやまたず、したたか脳天に打ちあてました。これで、さしもの猿王くらくらとなって、いっぺんに神通をうしない、よろけてつまづきました。地びたをひっかいて、むりに起き上がろうとしますと、眞君の使い犬が、わんわんむらがってきて、胸、腹、手足のきらいなく、くいつき、かみさいて、引き倒しました。悟空は、歯をむきだしてくやしがりましたが、こうなってはかないません。むざむざ、いけどりにされたうえ、琵琶骨に孔をあけられて、変化できなくなりました。
四天王、李天王、顯聖二郎眞君以下、十万の天兵は、いけどりの猿王をまん中におしつつんで、意氣ようようと天宮へがいせんしました。
玉帝は、「しゃつ、この妖猿、いっ時もはやく切りきざんで、ながく、わざわいの根を絶て。」といって、さっそく大力鬼王にいいつけて、齊天大聖を、斬妖台に引かせました。
ところで、不老長生の奥義をきわめ、千変万化の神通をほこった齊天大聖孫悟空、このまもおめおめ、首切役人の手にほろびますか、次の一章をよめばわかるでしょう。

七　如來の手

八卦炉

さて、齊天大聖孫悟空は、あまたの天兵に守られて、斬妖台の下におしすえられ、降妖柱にかたくいわいつけられはしたものの、刀できっても刃が立たず。おのでさいても、槍でついても、劔でえぐっても、肉ひときれはがれず、血ひとしずくこぼれません。なんというかたいからだだと、火あぶりにしてみましたが、身の毛ひとすじもえません。かみなりといなづまの神にたのんで、火矢をぶちこんでみましたが、孔ひとつあかないのです。大力鬼王ももてあまして、
「この大聖、どこでこれほどなすばらしい護身の法を、しこんで來ましたことやら、まったくの不死身で、どうにも手におえません。」といって、うったえました。
玉帝も、これにはこまって、どうしたものかと、またもそうだんがはじまります。

すると、太上老君がきいて、

「それは猿め、九千年の仙人桃をしたたかくらった上、仙人酒をのみ仙丹をぬすんでいるからです。なにしろ、それは五つのふくべに、ありったけの仙丹を、半煉、本煉、なんでもかまわず、つかんで腹に入れている。それが腹の中の三昧火で、ひとつのかたまりに煉られたので、たたけば、かんかん音のする金鉄のからだを、きたえ上げてしまったのです。これでは、切ってもついても、きずひとつつくものではない。いっそわたしがあずかって、八卦炉の文火と武火で、仙丹といっしょに焼ききたえてみましょう。するうち、やがて灰になってしまうでしょう。」

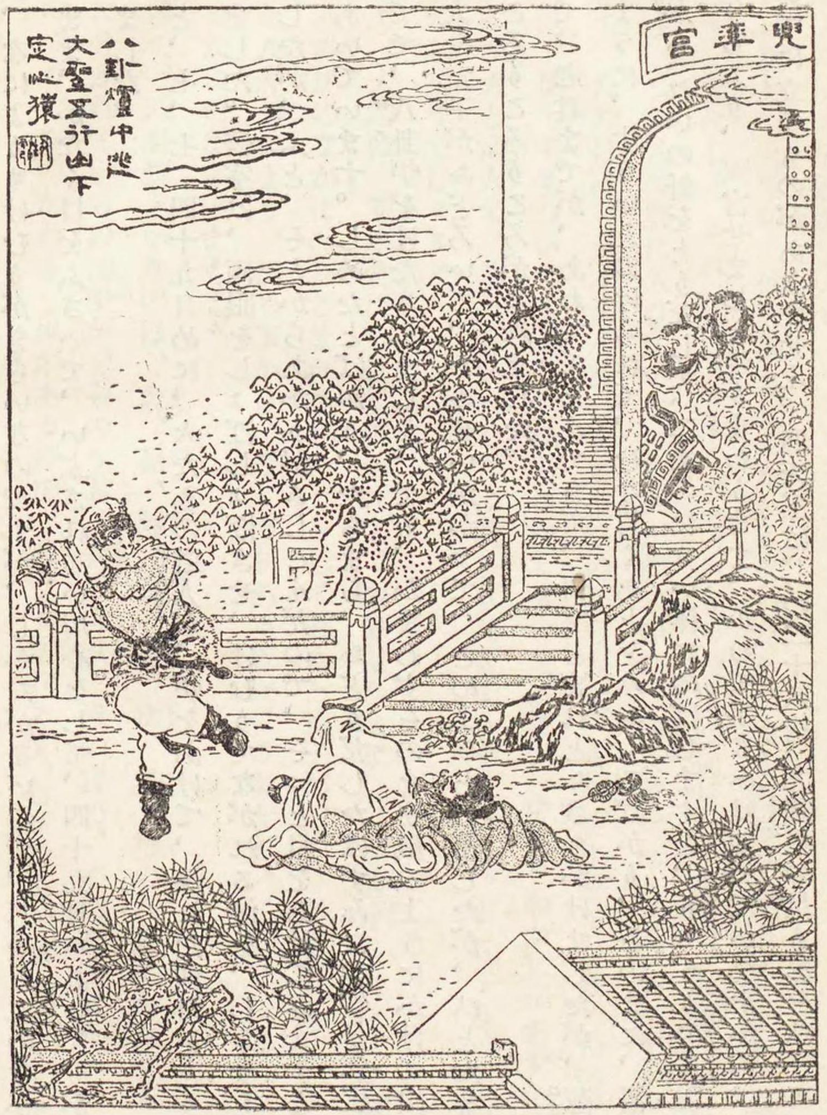
そこで、大聖は、兜率宮につれて行かれて、縄をときはなし、琵琶骨にとおした輪をぬいて、八卦炉のなかにおしこまれました。そして道人と童子が、かわるがわる見まわって、火のけをたやさぬよう、炉の下から、ぼうぼうあおぎ立てる炭火で、じわじわ焼かれることになったのでございます。

ところで、八卦炉というのは、乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤の八卦にかたどり、八つの宮に分かれているのですが、そのうち、巽の宮は、風の宮で、ここだけは火がよけてこないのです。そのかわり、風があるので、けむりがたえず、むんむんとはいってきます。

悟空は、なによりもけむりがきらいなのですが、しかたがないので、じっとこのなかにはいったまま、かたく目をふさいで、いぶされない用心をして、四十九日のあいだ、がまんしていました。

すると、七、七　四十九日めに、火たきの道人が、炉をあけて、煉れた仙丹をとり出そうとしました。悟空は、両眼をしょぼしょぼさせ、けむりでながれる涙を、しきりとふいていましたが、ふと、そとからあかりがさしこんだので、そっと目をあけてみますと、炉の口があいています。しめたとばかり、たちまち、おどりだしたはずみに、がらんがらん、音を立てて、八卦炉をけたおしました。でも、かまわずそのまま風のようにかけて出ました。道人や童子がおどろいて、おおぜいかかって、とめようとしましたが、ひとたまりもなく、ころりころりころがされました。

そこで、老君までが、あわててとんできて、悟空とまれとおさえかけましたが、葱をひきぬくように、すういとぬけられて、むなしくあとをみおくるばかり、そのまに、悟空は耳の中から、れいの針をとりだして、二丈のにょい棒にのばしますと、りゅうりゅうと、うちふりうちふり、天宮せましと走りまわります。かねて手なみは知っていますから、たれも、あいてに立つものがありません。四天王はじめ二十八宿、九曜星の星も影をひそめ、鳴



りをしずめていました。

こうなると、猿王のひとり天下です。四十九日八卦炉の中できゅうめいさせられたあとだけに、青空の下で、自由にあばれまわるのが、とてもうれしくてなりません。にょいきんこ棒をかついで、たてよこ十文字に打ってまわりながら、通明殿の下まで來たとき、そこにつめていた佑聖眞君のおそばづきの王霊官が、金のむちをふるってかけてきて、がっきと悟空のにょい棒をうけとめました。

そこで、むちと棒とのせり合いになりましたが、勝負がつきません。佑聖眞君が、加勢によびあつめた三十六人のかみなり神が、手に手に、刀や戟、鎚や斧をふるって、きそいかかりましたが、あいてが多くなるほど、悟空は元氣百倍、いよいよはげしくあばれだして、あわや霊霄宝殿の御殿の上までうちあがって、玉帝の御座をも、おかしかねないいきおいになりました。

こう大な佛さまの力に、猿王もてあそばれる

玉帝の心配苦労はたいへんです。もうこの上は、西天のしゃか如來の広大なお力にすが

るほかはない、ということになりました。そこで、ふたりの天宮役人が、はるばる西天竺の大雷音寺まで出むいて行って、おしゃかさまをおねがい申してくるしだいとなったのでございます。

はるばる、天宮からのお使ときいて、如來はさっそく、ふたりの天官を召しよせて、用事のおもむきをおたずねになりました。ふたりの役人はそこで、齊天大聖孫悟空のそもそもの生いたちからはじめて、いちどならず、二ど、三どと、ひと方ならず天宮をさわがした、いちぶしじゅうをのべたてました。そして、いまも八卦炉をぬけだして、天宮にたいへんな反乱をまきおこし、このままでは、玉帝のみ位もあやういしだいと、この上は、如來のお力にすがって、妖魔のわざわいをのぞくほか、道のないことを、いかにも、こまりきった顔つきで、こまごまと申しあげたのでございます。如來はすっかりおききになると、大きなあわれみの心をおこされました。そこで、お弟子の菩薩たちのほうをみて、

「なんじら、そのままおだやかに、この法堂の座位を守って、みだりに動くことなかれ、ほどなく魔をしずめ、みだれをおさめ、わがかえるを待てよ。」と、いいのこされました。

さて、阿難、迦葉のふたりの尊者を右ひだりにしたがえて、大雷音寺を立ちいでられ、まもなく霊霄宝殿の門のそとに立たれました。すると、もう中で、おおぜいおめきさけんで、劔や戟をうち合う音が、すさまじくきこえてきます。これは三十六人のかみなり神將が、悟空ひとりをとりかこんで、ただ、あれあれと立ちさわぐばかり、いっこうに攻めあぐねているところでした。

如來はそのとき、天官たちにお旨をつたえて、

「しばらくかみなり神將らに、戟をおさめてしりぞかせ、かの大聖なるものを、わが前によびきたれ。かれになにほどの法力があるか、われ、みずからためしてみよう。」とおおせられました。

これで、かみなり神將が、いったんひきあげたので、三つあたまに六本うで、それに六本のにょい棒をもたせて、あしゅら王のいきおいで荒れまわっていた大聖も、ほんとうの孫悟空にかえりました。それでも、おなかのうっぷんはおさまらず、まっ赤な顔をよけいまっ赤にして出てきて、

「おれに用があるとほざくのは、どこのどいつだ。」と、どなりました。

如來は、にんまりおわらいになって、

「われはこれ、西方極樂世界の釈迦牟尼尊者。きけばなんじ、天上下界のわかちなく、くるいまわり、しばしば天宮をさわがすというが、もとどこに生まれてそだち、なん年道を

修め、なんのために、このらんぼうをはたらくのか。」と、とわれました。

悟空は、そこで、とくいになっていいました。

「おれはがんらい、天と地の霊氣があつまって、ひとつにこりかたまってできた仙物だよ。それが、つい猿のかたちをうけてうまれて、ながく年花果山に住み、水簾洞の主になっていたが、とおく出て行って仙人の師をたずね、仙人の道を求めて、不老長生の術を煉りきたえたのさ。そうして、神通自在な身になってみると、下界のすまいがせせこましくてたまらない、そこで、天上世界をわがものにして、霊霄宝殿の主になろうというのだ。天下はまわりもちという。むかしから強い者が弱い奴に、とって代るのは、めずらしくもないことだろうじゃないか。」

すると、如來さまは、くすぐったそうに、こういわれました。

「ははは。たかが、猿のばけもの、大それた心をおこしたな。玉皇上帝の御位をぬすもうとは、せん上きわまる。ああみえても玉帝は、とおい大昔から、およそ一千七百五十劫、一劫十二万九千六百年の一千七百五十倍も修行をつまれた方だ。なんじ畜生にうまれて、よくいく年の修行をつんだというのだ。はやく正道に立ちかえって、身分そうおう、下界の猿王でくらせ。長生の術と神変の法をすこしばかりならいおぼえたほか、ぜんたい、なんじになんの能があって、天宮の主になろうとくわだてるか。」

「なんの能がないというか。おれには七十二もの神変がある。万年不老長生の秘術がある。きんと雲にちょっとのって、ひととび十万八千里だ。これで、天位をのぞむのが、なんでせん上だ。」

「よし、それならなんじと賭をしよう。それだけの手なみがあるなら、そのきんと雲とやらにのって、わたしが手のなかからはいだしてみよ。なんじもし勝てば、玉帝は西の方にうつってもらい、天宮をなんじにゆずらせようぞ。」

そういう、如來のおことばをきいて、悟空は、腹の中でくすんとわらいました。

「ほっほ、この如來のくそだわけ、とんだことをぬかす。ひととび十万八千里とぶおれが、どうはかっても、一尺とはない手のひらのなかから、どうすりゃとびだせないというのだ。」

こうおもいましたが、それでもおもしろ半分、

「よし、おもしろい、おまえさんのいうとおりにしてやる。」

「それではやれよ。」

こういって、如來は、右手をひらかれます。それは、はすの葉をひろげたぐらいの大き

さでした。大聖はそこで、にょい棒を耳の中にたたんで、じっと精神をおちつけ、身をかえして、ぱんと、如來の手のひらにとびこみました。そしてすぐと、

「さあ、おれは出て行くよ。」というなり、ひとすじの光る雲になり、やがて影も形もみえなくなりました。

如來さまが、でも、世界じゅう見とおしの慧眼をさだめて、よくごらんになりますと、悟空は、風車のようにくるくるひとつ所をまわっていて、しばらくも、じっとしていないのです。

ところで、つい手のひらとおもったものが、天のようにはてしなく、ひろく、大聖は行くほどに、そこらが、天のはずれらしく、大きな五本柱が、つやつやと赤い肉色して、むこうにぬっと立っていました。そっとさわってみますと、すこし青くさいようです。

「さあ、ずいぶんとおく來た。そろそろ道がなくなりそうだ。もうかえろう。なにしろこれで、霊霄御殿はこっちのものさ。だが待て、ちょっと後日のしょうこに、一筆のこして行こう。」

ひとり言をいいながら、身の毛をぬいて息をふきかけますと、一本の筆になって、たっぷり墨も、ふくませてありました。そこで、まん中の上に、墨くろぐろと、大きな字で一

行がきに、

「齊天大聖到此一遊」とかきました。それから、みえもなく、裾をまくって、一ばんめの柱の下で、しゃあしゃあとやらかして、またひらりときんと雲にとびのりました。そして、もと來たとおり、如來の手のひらにまたもどって、

「さあ、行ってかえって來たよ。玉帝にいって、すぐと、天宮をゆずりわたしてもらおうぜ。」とわめきました。

如來はそのとき、しかるようにいわれました。

「なんじ、この小便猿、さっきから、わが手のひらの中で、ただくるくる、はねまわっていただけではないか。」

「ばかいいなさんな。天のとっぱずれまで行ってきたのだぞ。五本うす赤い柱があって、さわると、ぬるぬる青くさかった。うそだとおもうなら、いっしょに來てごらん、字をかいてのこしてきたから。」

「ふん、よく首をかがめてみるがいい。」

こういわれて、悟空は、まんまるい金眼をみはって、よくみますと、なるほど、如來さまの右の中指に、「齊天大聖到此一遊」と、もったいらしくかいてあって、おやゆびと

ひとさし指のあいだの所をかぐと、お猿のいばりのにおいがしました。

さすがの齊天大聖、これにはおどろきあきれました。

「こんなはずがない、おれはたしかに天の柱にかいてきたのだ。それがどうして、こいつの指の上に。こりゃあなにか、ひとのすることを、先にまわって知る術があるのだな。——どうしたって、そんなはずがあるものか。よし、もいちど行ってくる。」

そこで大聖、ぽんと身をかえして、また如來の手のひらをとびだそうとしました。とたんに、如來は、はたと手を伏せて、悟空を、手のひらにおさめたまま、天宮の西大門のそとにおしだされました。そして五本の指をそのまま、金、木、水、火、土、五つの山がひとつづきになった五行山にかわらせて、その山の底に、かるがると悟空をおしこまれました。

そのとき雷神たちは、阿難、迦葉のふたりの尊者と、ともどもに合掌して、

「善哉、善哉、ありがたや。」と、となえたことでございます。

五行山

さて、如來さまのこう大な法力で、長年天宮の平和をみだしたばけ猿王も、二どとあば

れだす心配がなくなったので、玉皇上帝、太上老君以下のよろこびはいうまでもありません。瑤池の仙母から、とおく南極の福祿壽星まで、それぞれ、けっこうなおくりものをさげて來て、あつい佛のご恩をたたえました。さて、かずかずのささげものを、阿難、迦葉にあずけて、如來が、西天にむかってかえりかけられるところへ、下界をみまわってあるく天の役人が來て、

「あの大聖め、しきりと首をのばして、出そうにいたしております。」としらせました。

如來はうなずかれて、

「なに、かまわん、かまわん。」といいながら、袖をあげて、一枚の張札を出されました。

そして、

「阿難、これをあの山の上にはれ。」とめいぜられました。札には、

「唵嘛呢叭迷吽」

と六字、金文字でしるされていました。

阿難はそれをいただいて、下界に下ると、五行山の上に立って、頂上の四方石に、ぺったりそれをはりつけました。とたんに、五つの山が、五方からよって來て、ぬい合わせたようにぴたりと合わさりました。悟空は、それなり、あわれ、五つの山のそこ深くふうじ

こめられて、やっと息のかよう孔だけがあいているだけです。もう、いかな神通の大力でひっかいても、もちゃげても、土くれひとつうごかなくなりました。

阿難が、やがてもどってきて、ごへんじを申しあげました。如來はそこで、ふたりの尊者をひきつれて、いよいよ天宮の門をおでましになりました。

そのとき如來は、大きなあわれみのお心から、五行山の山の神、土地の神、五方揭諦（ごかたい）の神などを召され、悟空のために、こののちのことを、こまごまとおたのみになりました。それで、ひもじいとき、鉄丸（てつだま）をくわせ、かわくとき、銅汁（どうじる）をのませて、いつかかれの業（ごう）がつき、わざわいがとけたとき、來てすくいだすもののあるまで、番をさせられることになりました。

佛祖如來は、西天にかえられました。さて、猿王の業（ごう）とわざわいが、いつつきて、とけちって、悟空大聖ふたたび世にあらわれ出ますか、それはこののちの物語でございます。

中の巻

三藏法師の物語

八　経文とりの法師をもとめて

如來のかなしみ

人間の世界はいうにおよばず、上は、天宮のてっぺんから、下は、奈落のどん底までもさわがした、さしもの齊天大聖孫悟空が、しゃか如來の大きな手のひらのなかに、ぽんとまるめこまれて、ぐうもすうもなく、五行山の山の底ふかくうずめられてから、五百年たちました。

ある年の秋、七月の十五日、如來さまは、天竺國大雷音寺の大宝閣の上に出て、三千諸佛、五百羅漢、八大金剛、四大菩薩、そのほか佛の國のおなかまたちと、盆まつりの供養をしておいでになりました。神神しい五色の雲が虹のようにたなびき、かんばしい天花は、雪のようにふりました。ですが、如來はなぜか悲しそうでした。

「如來さま、どうかなさったのでございますか。」

菩薩たちが、しんぱいしてたずねますと、佛祖は、いつものようにやさしくいわれました。

「いや、かくべつ、どうしたということはない。ただ、ここにすわっていて、大千世界の四つの大陸をながめわたすうち、南贍部州の人間世界が、どこよりもみだれて、まことの佛の道をわきまえず、まよっているので、おもわず心がくらくなった。慾にはしり、利をあらそい、よるもひるもなく、人間同士、ねたみうらみ、攻めたたかって、ただのいっとき休むひまもないありさまは、鳥けものにも、はるかおとっている。」

「その罪ふかい人間を、どうして救ったものでございましょう。」

「がんこにかたまりついた人間の悪心をほごして、善心へみちびくには、大乘の教による眞正の経文をよませるほかはない。わが大雷音寺には、経藏、律藏、論藏と、三つの藏におさめた三藏の経文一万五千一百四十四卷がある。これを人間世界へ送って、あまねくおぜいの民たちのあいだに、まことの佛法をひろめる。これがかれらをすくうなによりの近道である。」

「それでは、さっそく、八大金剛の力士にいいつけまして、経文を雲にのせ、ただ半日ではこばせましょう。」

「いや、それでは、あけている口に、棚からぼた餅がころげおちたようなものだ。おいしいとおもうと、すぐにわすれてしまう。ここはごくろうでも、たれかひとり、法力をそなえた大菩薩に、東方人間世界まで出むいてもらって、人間のなかでも、いちばん心のすなおな、信心のあついものをたずねもとめることにする。自分ひとりの身をころして、なん千万億の同胞をたすける大きなあわれみの心と、どんななんぎにも、むかってつきすすむ、つよいたけしい心をそなえた、生き佛のような人間の法師が、かならずひとり、あらわれるであろう。その人間は、なん十年難行苦行がつづこうとも、なん百千里ぼうけんの旅をかさねようとも、たゆまずひるまず、いつかこの西天の佛の國にたどりついて、眞正の経文を、ふる里へはこんでかえるであろう。三藏の経文をつたえたその法師は、三藏法師とよばれあがめられ、その説法は、そのまま如來の声のようにほめたたえられるであろう。」

如來のおことばがおわるとさっそく、佛たち菩薩たちのなかから、ひときわすずしい声で、

「その経文とりの法師をたずねますお役は、ふつつかながら、わたくしが、つとめましょう。」

こういって立ち上がられたのは、南海に住む観世音菩薩でした。

「なに、神通こう大な観音尊者が、ご自身すすんで行ってくださるか。それほどけっこうなことはない。」

如來は、おおよろこびで、お前立の阿難、迦葉ふたりの尊者に、「それ、五つのたからを。」といいつけられ、観音菩薩にむかっては、こういわれました。

「経文とりの法師は、いかに道中とおくけわしくとも、ぜひ自分の足で、山を踏み水をわたってこなければなりません。雲にのり空をわたる法術を用いることはゆるされません。五つのたからのうち、きんらんの袈裟は、それを着れば、心が澄みあかるく、まよいのふちをのがれ出る。九つの環の錫杖、これをつけば、猛獣妖魔の毒害をまぬかれる。さて、この三つのたが輪は、どれもおなじようなかたちだが、「金」と「緊」と「禁」と、それぞれ字のちがった三つの呪文が、それにあらわれていて、どんなきついあいてでも、このたが輪を、あたまにはめて、金こ呪か、緊こ呪か、禁こ呪か、三つのうち、ひとつをとなえれば、あたまのわれるほど痛がって、すぐと降服する。これはよわい人間の法師が、通力自在な魔ものや弟子をおさえる、いわば守り札のようなものです。」

行きとどいた如來のお心づくしを、観音菩薩は、一一、ありがたくうかがいながら、

「それでは、やがてよいおたよりをもってかえりまず。」といって、ていねいに礼をしてし

りぞきました。そうして、その日すぐと、お弟子の惠岸行者ただひとりつれて、東天にむかって行ったのでございます。」

河ぼうずのばけもの沙悟淨あらわれる

さて、観音菩薩と惠岸行者とは、ひたすら空の上をとんで、小半日すぎたとき、はるかな下から、きゅうに、すごい水音がたかくきこえたので、雲をとめてみますと、これはまたなんという大きな河でしょう、こちらの岸からみただけでは、どこにむこうの岸があるのか、たいらいちめん、まっくろな水が、さかまいているだけで、まるで見とおしもつかないありさまです。まして、どこが水上で、どこへどう流れて行くのか、さすがの菩薩もあきれて、しばらくは、すさまじい水のいきおいをながめていました。天竺の國から大沙漠を越して、シナの本土にはいる途中、流沙河という大河があって、河のはばが八百里、上流から下流まで、ながさは、いったいなん万里あるのか、だれもたしかに、はかったものがないと、話にきいていたのは、これであったかと、菩薩は惠岸と語りあいました。ところで、この海のようにひろい大河を、どうして櫂一本でわたれようか。雲にものらず、

つばさももたない人間の法師が、三藏の経文をとりに、せっかくここまで來て、むなしく引っかえすことになるのではないか、そうおもって、菩薩がじっと考えこんでいられるとき、ふと、足もとで、ばちゃばちゃと、はげしく水のはね上がる音がしました。なにごとかと、菩薩が顔を上げられますと、とたん、目の前に、どすんと青ぐろい顔に、目ばかり赤く光らせて、それこそかっぱとも海ぼうずともつかない大和尚が、丸太んぼのような錫杖を、りゅうりゅうとふりまわしながら、とびだして來たのでございます。ですから惠岸はすかさず、大ごえに、

「ばけもの、待て。」と、ひと声あびせながら、これも鉄棒をまわして、菩薩をかばいます

と、怪物も「なにを。」と、負けずに打ってかかります。そこで、どちらもぼうずとぼうず同士が、小半時、火花をちらしてたたかいましたが、勝負がつきません。するうち、河のぼうずは、からりと得物をなげだして、

「もうやめようよ。和尚、ぜんたいお前、どこから來た。」といいました。

惠岸も、鉄棒を引いて、

「おれは托塔天王第二の王子木叉、出家して惠岸行者だ。お師匠さまのお供で、東の國へむかうとちゅう、じゃまするばけもの、きさまこそ、いったい、なに者だ。」といいますと、

怪物はしばらくかんがえて、
「はてな、すると、南海の観音菩薩のお弟子ではないか。」というのです。
「だから、あのとおり、あそこに、お師匠さまが來ていらっしゃるのが、ささまの目に見えないか。」
いわれて、河ぼうずは、あらためて菩薩のお姿を見ると、あわててひざをつき、ひたいを砂にすりつけてあやまりました。そこで、話をききますと、もともと河のばけものではなく、天宮の霊霄宝殿につかえて、玉帝のお輿の簾をあげる役をつとめた捲簾大將というものでした。それが、ある年、蟠桃会の宴のとき、玉帝おだいじの玻璃のさかずきを、あやまって落してこわし、その罰に天を追われて下界に下ったのですが、あさましや、この流沙河の河ぼうずの姿にかえられたのです。その上、七日にいちど、天上からするどい劔がとんで來て、胸をうちます、その痛さといったらありません。なにしろ、魚もすまない大河なので、たべものにこまって、空腹になると河の上に出て、往來の人間や牛馬をとって、わずかにうえとさむさをしのぐという、きけばまことにあわれな身の上であったのです。
観音菩薩は、そのとき、やさしくおさとしになりました。

「そんなことをしていては、罪に罪をかさねるばかりだ。いまからでも、おそくない、善心にかえって佛の道に入り、やがて三藏のお経文をとりに、天竺の國へむかう法師の通りかかるのを待って、弟子になれよ。そうすれば、もはや胸をうつ劔もなく、うえとさむさにくるしむことも、なくなるであろう。」
こういわれても、怪物は半分うたがうように、
「これまでも、天竺へ経文をとりに行くという人は、たびたび來ましたが、それはみんな、わたしがとってたべてしまいました。ただ、たべたあとの人間のがいこつは、たいてい、川の底にしずんでしまうのに、経文をとりに行く人間のどくろだけは、なにか功徳でもあるのか、それはかるい鳥の羽根さえうかばない川なのに、しずめても、しずめても、うき上がるので、すべてで九つ、このとおりあつめて、ひもでつないで、頸飾のようにぶらさげているのです。ほんとうに、その経文とりの和尚さまは、ここまでやってくるでしょうか。」
「それはかならずくる。信心して待つがよい。くびにかけた九つのどくろも、そのときになると、しぜん、使い道がわかってくる。たいせつにしてもっていなさいよ。」
そこで、菩薩は、この河ぼうずに、あらためて僧たるものの守るべき戒をおさずけにな

り、河の沙にちなんで、姓を沙、法名を悟淨とつけて、沙悟淨とよばせることにさせました。そうして、こののちは、いっさい殺生をやめて、経文とりの法師を待てと、かたくいましめて立去られたのでございます。

豚の魔ものの猪八戒と小龍の馬

菩薩は、沙悟淨とわかれて、また惠岸行者をお供で、先をいそぐとちゅう、ひとつの高い山にさしかかりますと、みょうに寢ぐさく、けだものくさい、いやなにおいがして、たまらないので、いそいで雲をとばして、そこをかけぬけようとしました。するうち、もう、まっくろなつむじ風をさきに立てて、ひととりの魔ものが、うしろから追って來ました。この魔ものは、こんども、ひととき、惠岸とはげしくわたりあって、打ちつ打たれつしていましたが、菩薩がもどかしがって、蓮の花びらを一枚、上から投げおとされたので、からみ合っていた魔ものの得物の鉄の熊手と、行者の鉄の棒とが、さっとふたつに分かれました。あきれて、しばらくぼんやり空をながめて立っていた魔ものは、ふと觀音菩薩のお姿をみつけると、おそれ入ったように、鉄の熊手をなげすてて、菩薩の足の下にひれ伏しました。

魔ものは、みにくい豚のばけものでしたが、もとは、やはり天上の天の河で、月宮殿につかえていた、天蓬元帥という役人であったのです。それがどうも、うまれつき女とあそぶのが好きで、あるとき、お酒に酔って、女官の嫦娥にふざけかけて、つとめをおこたったため、玉帝のおとがめをうけて下界に追われました。ところが、そそかしく豚の胎内にとびこんだので、くちばしの大きい、耳のながい、みにくい豚の姿に生まれかわり、ついには福陵山というこの山のばけものなかまにはいって、殺生の罪をつくるようになったというのです。

菩薩は、この魔ものをもおしえて出家させ、法名を猪悟能とつけて、やがて、天竺へ経文をとりに行く法師のくるのを待てとおしえました。

猪悟能は、頭をたたいて、お礼を申しあげました。ところで、このばけもの、猪悟能、または猪八戒と名のって、佛のお弟子にはなったものの、もってうまれたおおぐらいと女あそびの癖までが、ついでにきれいさっぱりやむでしょうか、それはこののちの話で、わかるでしょう。

さて、猪八戒に送られて、菩薩と行者がまた進んで行きますと、こんどは、雲のむこう

で、なにかかなしそうに泣きさけぶ声がします。近よってみますと、一ぴきの小龍が、空中にぶらさげられて、苦しみもがいているのです。

小龍は、西海龍王の子でしたが、あるときいたずらをして、龍王殿のだいじな珠を焼いたので、天宮からおとがめをうけて、空につるされた上、死罪に行われるはずになっているということです。菩薩は、そこで、玉帝にねがって、小龍の重い罪をゆるしていただいたかわり、そのつぐないに、この小龍を馬にばけさせ、経文とりの僧をのせて行くようにはからわれたのでございます。小龍は、おもわずいのちびろいをして、大よろこび、さっそく菩薩の仰せつけにしたがって、深い谷のそこに身をひそめ、いつかお経文とりの法師の來たとき、白馬になってのせて、天竺にむかう日を待つことになりました。

齊天大聖ここに在り

そののちは、観音菩薩と惠岸行者、ひたすら東へ東へと道をいそぎましたが、ほどなくまた、みるからふしぎな瑞氣のたなびいているひとむれの山が、むこうにあらわれました。そして金色の光が、さんらんと、山のそこからてっぺんにまで射出しているのです。行者

はそのとき、菩薩の袖をひいて、

「お師匠さま、あれが五行山でございます。むかし、天宮をさわがしました名だかい齊天大聖孫悟空が、如來さまのお札におさえられて、あれからずっと、あの山の底の石倉にうめいているのでございます。」

菩薩は、にっこりうなずかれて、行者のみちびくまま、山の上におりてごらんになりますと、如來のお筆で、

「唵　嘛　呢　叭　迷　吽」

と、六字の眞言を、紙にかいて、ぴったりはりつけてあります。それが五百年、風と雨にたたかれながら、木にほって、漆で墨を入れたように、はっきりみえました。

「あのばけ猿も、一時は、天上天下無敵のいきおいであったが、こうなっては、あわれなものだ。このさき、いつ世の中に出られるか。」

師匠とお弟子のひそひそ話が、どうしてきこえたものか、そのとき、山の底から、

「上で、おれのわるくちをいうのはだれだ。」

と、こういってどなったのは、たえてひさしい齊天大聖の声でした。菩薩は、そこで、土地の神、山の神に案内させて、悟空のとじこめられている石室までおりてごらんになりま

した。あわれ悟空は、一寸も身うごきならず、やっと口だけうごかしながら、菩薩のおじひにすがって、一日もはやく自由な身になりたいと、しゅしょうらしくねがうよりほかにないありさまです。菩薩は、そこで、かれを佛のお弟子にして、孫悟空という名を、そのまま法名にさせ、僧になったしるしの戒をさずけてやりました。そしてやがて、三藏の経文をとる法師が來て、長年のとらわれからとき放してくれる日を待て、とおさとしになりました。さて、それからはただ一本道、ひたすら、唐の都長安をめざして行かれたのでございます。

長安に着くと、師匠もお弟子もまず、きたないかったいぼうずに姿をかえて、人目をよけ、そこの土地神のほこらを、かりのすまいにして、ひそみかくれました。そこで、ゆるゆると、西の國の経文を東の國にはこんで、しゃか如來のだいじなお思いたちを、まちがいなくなしとげる生きぼとけの僧を、たずねさがすだんどりとなりました。さて、その生きぼとけは、はたしてあらわれ出るでしょうか、それが、これからのお話になるのです。

九　玄奘法師おいたち話

河の上のすて子

さて、大唐の都長安、いまの陝西省西安は、三千年の中國のれきしに名だかい、代だいのふるい都です。大昔、周の國の時代から、のち、秦、漢と二代つづいて、東の都の洛陽とならんで栄えた西の都であったのです。このとき大唐帝國は、第一代の太祖皇帝から第二代太宗皇帝と、つづいて兵はつよく國は治まり、建國のいしずえはまったく定まって、四方万國、文にも武にも、世界の中國とあおいで帰服するありさまでした。ですから、まして、首都長安城の繁昌は、口にも筆にもつくしがたい、たいしたものであったでしょう。

かしこい太宗皇帝は、世の中にあまねく、りっぱな人物をさがしあつめて、よい政治をさせ、彌が上にもこの國の文化を高めようというかんがえから、大臣魏徵のことばにしたがい、たれでもうけられる進士試驗というものをして、ひろく役人をとり立てることにし

ました。そこで、ひとかど学問も見識もありながら、うずもれている秀才を、ひとりでも多く世に出す道がひらけたので、このことを告げしらせる高札が、國ぐににまわりますと、それぞれの地方から、われもわれもと長安の都にむかって、あつまってきた学生の数は、なん千人にものぼりました。ところで、むづかしい試験を、しゅびよく甲上で通して、このなん千人のなかにただひとり、一番で及第して、狀元の栄冠をみごと頂いたのは、南の海州（江寧省）から上ってきた陳蕚、字（通り名）を光蕊という人でした。光蕊の名誉はたいしたものです。皇帝ご自筆の免狀をいただいたが、光蕊ゆうゆう白馬にまたがって、長安の町通をかっぱ、かっぱと馬を進めながら、時の大臣殷開山のやしきわきを通りかかりますと、溫嬌、またの名滿堂嬌というお姫さまが、すかさずあかい絹まりを、楼の上から投げました。それがうまく光蕊のかぶっていた黒い紗の頭巾にあたったのです。ところが、これが、いいおむこさんを射あてるまりであったので、光蕊は、さっそくむかえられて、一も二もなく、大臣のお姫さまをおよめにもらうことになりました。皇帝からは、おことばが下って、江州（湖南省）の州主、つまり知事の役に任命されることになりました。光蕊はけっこうな位と福をいちどにさずかった上、うちでひとり心配して待っていた老母をもよろこばせたので、孝行の徳までが、しぜんとむくいられることにもなりました。ま

ずここまでは、とんとん拍子、陳光蕊ほど運のいいわかものは、天が下にないと、たれもうらやましがらないものはなかったのでございます。

ところで、ふるいシナのことわざにあるとおり、禍福はあざなえる縄のごとし、わざわいとしあわせとは、いつも、ないまぜの、となり合わせでした。光蕊は知事になって、わかい奥さまと、年とった母親をつれて、季節も春の末、しとしととふる雨に、てんてんとさいた赤い花がぬれるなかを、江州にむかって下りました。とちゅう、洪州という所で、老母が病氣になったので、しかたなく二三日宿屋にとどまるうち、老母がたべたいというので、ちょうどそこへ賣りにきた魚屋から、金色のみごとな鯉を一ぴき買いもとめました。ところが、その鯉の目の光が、いかにもふつうでなく、きらきらかがやいているので、きみわるくおもって、料理することはやめ、そのまま河に放してやりました。母親もそうきくと、かえって「生きものを放すのはいい功徳だ」といって、よろこんで、そのせいか病もよくなりました。でも、まだ十分さっぱりとはいかないので、病人の養生は宿にたのんで、陳光蕊夫婦は、先をいそぐまま、そこを立って行きました。すると、その道みち、目ざす江州をつい目の前に見ながら、なんという、いやなまわりあわせでしたろう、洪江という河をわたる船のなかで、あいにく、船頭がふたりともわるものであったため、かわい

そうに、ひとりつれた供の男が、まずころされ、光蕊も、櫂でうたれて、半死半生のまま、河の水にはめられたのです。そのまに奥さまの溫嬌は、夫につづいて身を投げようとしたのを、船頭のひとりの劉洪という奴に、むりやりおさえられて、江州の州役所までつれて行かれました。その上、船頭のくせに、なかなかわるがしこい劉洪は、すばやくはぎとっておいた光蕊の着ものを、そのまま着こんで、にせの江州州主になりすまし、溫嬌を妻といつわって、うまうま、いなか役人をだまして、身がわりの知事とばけてしまったのでございます。

まだ、はたちにもならないわかい溫嬌は、とほうにくれて、いくたび、すきをうかがって、自害しようとしたかしれません。けれど、夫光蕊のたいせつな子を、もう、おなかにもっているので、この子を生みおとすまではとおもって、がまんするうち、いつか一年ちかい月日が立ってしまいました。

すると、ある日、溫嬌が、もうまもなく、この世の光をあびて出ようとする赤ちゃんのことをおもい、行くえのしれなくなった夫や、ふる里の親たち、病氣のままのこしてきた姑のことなどを、あれこれとおもいだして、うつらうつらしていますと、ふと耳のはたで、そっと「溫嬌、溫嬌」とよぶ声がしました。そうして、

「われは観音菩薩のおことばをつたえるために、天宮から下った南極星君である。そなたのいま、胸にもっている赤子は、いつか、あまねく、人間ぜんたいのために、大きなしごとをしとげて、ながく世に名をのこす、りっぱな人間となるであろう。かならずたいせつにして、はぐくみそだてよ。そなたの夫もぶじで、龍王の宮にすくいとられている。生きて夫にあい、親子めでたくひとつになり合う日をたのしみに、いまの苦しみにたえよ。」

こういわれたのを、夢うつつできいて、あとまで、はっきりそのことばをおぼえていました。そのうち、こどもはぶじにうまれましたが、わるものの劉洪にみつかれば、やがて大きくなって、その子に仇をうたれることをおそれて、非道に、ころそうとするにちがいない。どうしたものであろうと、溫嬌は、しあんにあまっていました。そこで、この子が、ほんとうに夢のお告のとおり、りっぱな行く末をもったものなら、どうか神ほとけのおちからで、たれか、じひぶかい人の手で、すくわれますようにと、心にねんじて、こどもをすてるけっしんをしました。それにしても、のちのあかしになるようにとおもって、小指をかんで血を出して、この子の両親、祖父母のことから、どうしてすて子しなければならなかったか、くわしいわけを、布に血書で書きしるして、赤子の胸にぬいつけました。それから、こどもの左の足の小指にも、ちいさいしるしのきずをつけて、さて、自分の肌着を

ぬいで、それにこどもをくるんで、だいて川に出ました。すると、ちょうどそこへ、板が一枚、ながれてきたので、その上にねかして、しっかりとひもでいわえて、ながれのままにおし出しました。こどもは、板子にのったまま、ゆらりゆらり、しずかな波の上に、浮きつしずみつしながら、ながれて行きました。その行くえを、温嬌はいつまでも見おくりながら、泣けるだけ泣いたのでございます。

めぐりあい

さて、こどもは、板子にのったまま、ただよいただよい、金山寺というお寺の下までながれて行きました。寺の住持の法明和尚が、へやの中で坐禪をくんでいますと、どこかで、かすかに赤子のなき声がしました。ふしぎにおもって、声をあてにたずねて行きますと、きれにくるまれた赤ちゃんが、門前の川で、板子といっしょに桟に引っかかっていました。赤ちゃんは乳がほしいか、声かぎりに、おぎゃあ、おぎゃあ、さけび立てているのです。

「やれやれ、かわいそうに。どんな星の下に、どこの親の生んだ子であろうか。」

和尚さんは、心の中でそうつぶやいて、赤ちゃんをひろい上げてみますと、血書で、こ

まごまと、すて子の、いわれ來歴がしるしてあります。さてはてきのどくな親子もあるものと、ため息つきながら、和尚さんは、こどもを近所の女にあずけて、やしなわせました。しあわせと、こどもは助かって、虫氣もなくそだち、のびのびと大きくなって、いつか十八才の少年にまで成長しました。河の上を流れて來た子だというので、はじめのうち、江流、江流と幼名を呼ばれてきましたが、ここであらためて玄奘と、法名をつけてもらって、ほとけのお弟子になりました。そして、それからは、もう、ほとけの学問と修行のほかに、玄奘、はなにもおもわず勉強しました。

ところで、ある日、それは春の暮ちかい、あたたかいお晝すぎでした。お弟子の僧たちが、年よりも若いのも、ともどもに、寺の大庭の木蔭にあつまったなかに、玄奘もまじって、ほとけの教のことを話しあいました。それがむづかしいぎろんになりますと、ちえも学問も、たれひとり、わかい玄奘の足もとにもおいつかないなかまが、みんな、言いまかされてしまいました。すると、なかのひとりがくやしがって、

「この業畜生、すじょうもわからず、親もない宿なしのくせに、あまり図にのるなよ。」といって、たしなめました。これが、玄奘には身を切られるほどつらかったので、それなりかけだしていって、半分泣き顔で、お師匠の大和尚にうったえました。

「犬猫にも、父母はございます。人間とうまれて、父母の名も知らず、故郷も家も、わたくしだけにないというのは、どういうわけでございましょう。」

こういって、玄奘はわっと泣きくずれました。すると、大和尚はうなずいて、

「よしよし、わたしのあとについてくるがいい。」といいながら、先に立って、方丈の大梁の下まで行くと、そこにつるしてある匣をおろしました。匣をあけますと、あれなり十八年、そこにしまったままになっていた血書のすじょうがきと、母親のうつり香のしみた肌着が出てきました。これで玄奘は、はじめて自分の生まれたときのひみつを知りました。そして両親やおじいさまおばあさまのことをなつかしくおもいながら、自分の一家をこれほどひどいなんぎにおとし入れた賊の一味をたずねだして、天罰をうけさせるのが、子たる者のつとめだとおもって、かたく歯をくいしばったのでございます。そこで、玄奘は、あらためて大和尚の前に膝まずいてねがいました。

「なんにも知らずに、十八年ものあいだ、これまでに大きくしていただきましたご恩は、なんと申してよいか、ことばには申しつくせません。この上にもいっしょうけんめい修業して、ほんのわずかでもご恩がえしいたすほかございません。しばらくおいとまをいただいて、さいわい生きておりますならば、母にもめぐりあって、おやこの名のりをして來たいとぞんじます。」

わかい玄奘のねがいを、大和尚はこころよくうけいれて、それには、麻のころもに托鉢ひとつ、まずしい雲水ぼうずの姿にやつして行くがいい、とおしえてくれました。

さて、だいじな夫のかたみの子を、風と波にまかせたなり、十八年泣きくらしてきたわかい母親の溫嬌は、どうしたでしょうか。あののち、こどもの生き死にはわからず、いつか生きてまたあえるという夢のお告があっただけで、夫の行くえもまるで知れずにいました。すると、ある晩、いったん欠けて三日月になった月が、またまんまるい満月になったところを夢にみて、これは、なにかかわったことのあるしるしかしら、とおもっていますと、そのあくる日、見なれないわかい雲水ぼうずが、どこからか來て、かどぐちに立ちました。お布施のお米をもって出てみますと、僧のおもざしは、わかれた夫の光悳に瓜ふたつであったのです。

こうして、十八年ぶりで、母と子は、ひっしとかたくだきあうことになったのでございます。そののち、玄奘が、江州へ行って、あまりのかなしみのために両眼をつぶしたものの、まだ生きながらえていたおばあさんにもめぐりあい、それから長安の都にまでのぼって、母の実家の殷大臣のおやしきをもたずねて、ここでも、じつのおじいさま、おばあさ

まと孫がはじめてあった、そのくわしい話は、はぶいておきましょう。さて、劉洪一味のわるものなかまがとらえられて、おもいしおきをうけたことは、まして、いうまでもないことでした。

龍宮から生きてかえったたましい

悪人はほろびました。母と子も、おじいさまおばあさまと孫も、めぐりあいました。ただひとり、たしかに生きているとも、死んだとも、陳光蕊だけが、やはりゆくえのわからないままでした。あきらめて、溫嬌と玄奘の母子は、十八年前、光蕊の投げこまれた洪江の渡に行きました。そして、そこに壇をもうけて、泣く泣く死んだもののおまつりをしました。ところで、坊さんがおおぜい來て、お経をよんでいますと、ふと、ぽくりとひとつ、人間のむくろが、河の上にうかびだしました。おやとおもううち、それはもう、水の中で、びくびくうごきだして、やがて、手をふり足を張って、たっしゃにおよぎだしたではありませんか。

陳光蕊のむくろに、たましいがはいって、生きてかえってきたのでございます。

光恣が、河に放してやった金色の鯉というのが、じつは洪江の川ぞこに住む龍王であったのです。龍王はいのちをたすけられた恩がえしに、いったん死んで、べつべつになった、光恣のむくろとたましいとを、よせあつめて、ひとつにして、いつでもまた、生きて娑婆世界にかえれるように、十八年のあいだ、龍宮にあずかって、たいせつにいたわっておきました。いま、陳氏の一家が、めでたくひとつにより合う時節が來たので、光恣は、龍王にわかれて、もういちどこの世にもどってきたのでございます。

太宗皇帝も、陳光恣のふしぎなよみがえりの話を、一一めずらしくおききになりました。そして、あらためて光恣を重い役にとり立てました。玄奘はしかし、長安の都の洪福寺にとどまって、いよいよほとけの道にはげみました。

十龍王の首

うらないの名人

かわって、ここは、長安の都をめぐる涇河のほとりでの話。ある日、そこの川ぞこにすむ老龍王の手下で、れいの巡海夜叉という、見まわりの役人が、陸の上に、なにかかわったことがと、きき耳を立てていますと、岸の上でりょうしと木こりと、ふたりのおじいさんが、居酒屋で一杯くみかわしたあとのごきげんらしく、筒ぬけの大声でしゃべっていました。

「ほい、李いじいさん、あすはまた、山で一日たきぎ切りか。虎にくわれぬ用心するがいいぞ。」

「なにをぬかす、張じじい、あんまり網をよくばりすぎて、河波に引っぱりこまれるなよ。」

「ふん、おらには、神さまのような先生がついていての、まいにち、ほういと吉凶のうら

ないで、一分一秒ちがえず、川の水がどこで上がって、どこで引いて、魚がどこにどうひそんで、どうあつまってくるか、金鯉一ぴきのお礼で、それこそ、百発百中、手にとるようもたしかに、おしえてくださるのだよ。きょうは、ひとつ、先生のいうとおりにして、涇河の東河岸に、網をおろして、西河岸で、釣をかけてみる。魚でも、えびでも、じゃこでも、うんとえものをしこんできて、その代で、あしたも飲もうぞい。」

「ああ、あてにして待っていようよ。」

「ははは。」

「ははは。」

高わらいで、ふたりはわかれて行きましたが、巡海夜叉はおどろいて、波の下の水晶宮までかけもどると、息せききって、きいたとおりしらせました。

「たいへんです。長安の町のうらない者が、りょうしにおしえて、涇河にすむ魚類のこらず、とりつくそうとしています。」

龍王は、なおもくわしい話をきくうち、ながいひげをふるわせ、からだじゅうのうろこをさかだてて、おこりだしました。

「よし、すぐと行って、ただひとうち、そのえせ賣卜者を誅罰してくれる。」

こういって、劔をひっさげて立ち上がったので、子龍や孫龍たち、それに、こいやかにの老臣たちが、あわてて袖にすがって引きとめました。

「大王さまが、お腹だちのあまり、そのままのお姿で、陸へおのぼりになれば、おどろいて雲も雨もいっせいにわき立ちます。すると長安の都には、時ならぬ風雨がおこって、人間はさわぐ、天宮からはおとがめがくる。これはよういならぬ事件でございますぞ。」

こういって、いさめたので、龍王も、なるほどとうなずきました。そこでとりあえず、なみの人間に姿をかえて行って、むこうの様子をみることにしました。

龍王は、わかい学者らしく、紗の角ずきんに、みどり色の儒者服といういでたちで、うらないの先生の門に立ちました。なるほど名人と評判のたかい先生らしく、墨くろぐろと『神易先生袁守誠』としるした看板のまわりに、おおぜい人があつまって、がやがやいっています。そこで、龍王は、中にはいって、あいさつがすむと、さっそく、

「先生、明日の天氣はどうでしょうな。」とたずねました。

すると袁先生は、しばらくかんがえていましたが、やがて

「雲、山にまよい、霧、林にこもる。明朝は雨ですな。」といいました。

「してそれはなん時ごろ、そうして、なん尺なん寸ふりますか。」

「されば、あすは辰の刻（午前六時）雲が出て、巳（十時）に雷がなり、ひる、午の刻にふりだし、未時（午後二時）にふりやむ。雨の量は三尺三寸零と四十八点です。」

龍王はきいて、おもしろそうにわらいました。

「はっは。先生、じょうだんではありませんぞ。そのとおりに行けばおなぐさみ、さっそくに、五十金お礼をさしだします。そのかわり、それがもしふらないか、ふっても、その時間にすこしでもちがってふれば、看板もろとも、この家の門をへし折って、お前さんを、長安の町からたたき出しますぞ。」

先生は、しかし、にんまりとしていいました。

「しょうちしました。よろしいようになされい。いずれ、雨がふったら、お出でなさい。」

龍王は、子龍、孫龍、けらいたちのならんでいるところへかえって來て、この話をしますと、みんな、

「なあんだ、雨のことなら、どうしようと、大王さまのおぼしめししだいではありませんか。うらない者め、きのどくだが負けだ。」といって、よろこびました。

龍王の罪

ところが、笑いさざめきの、まだしずまらないうち、たちまち、空の上から、

「涇河の龍王、天帝のおことばです。」という声がきこえました。

みんなはあわてて、天宮のお使のほうりこんで行った、めいれいがきをあけてみますと、

「勅して命ず、八河の水をあわせ、雷を駆り電をはしらせ、明朝雨をおこして、あまねく長安城をうるおすべし。」と、したためてありました。

しかも雨をふらせる時刻は、うらないのいいあてたとおり、一刻一秒もちがってはいないのです。

龍王はあきれて、ただきょとんと、空を見つめていました。そこで、そうだん役のなまず入道がきのどくがって、

「大王、お力おとしにはおよびません。天宮からいってきた時刻を、すこしちがえて、雨をおふらせになるがよろしい。それでうらないの先生をへこませて、看板をとり上げておやんなさい。」

龍王は、これでやっと安心しました。それで、あくる日は、夜があけると、まず風の神、雷の神、雲のこども、電婆さんをかりあつめ、みんな引きつれて長安城の空にあらわれましたが、わざと時刻を二時間づつおくらせ、巳の時から雲をわかし、午で雷をとどろかせ、未時に雨をふらせ、申時に止む手じゅんにしました。その上、雨の量も、三寸八点へらして、三尺零四十点だけにしたのです。そこで、雨がしずまり雲がちってしまうと、さっそく、龍王は、れいの若い学者の姿にばけて、袁守誠先生の門をたたきました。そうして、いきなり、らんぼうにとびこむと、ささえるものをつきのけて、机をけとばし、筆硯を、看板といっしょにふみくだきました。

このあいだ、先生は、ゆうぜん大椅子にかけたなり、だまって見ていました。龍王は、門柱をひきぬいて、それを、先生のあたまの上でふりまわしながら、

「さあ、山師のいんちき師の、えせ賣卜者、死罪にあたる一命だけはゆるしてやる。すぐ出て行かぬか。」とわめきました。

すると、そのとき、先生は、あおむいて空をみながら、せせらわらっていいました。

「死罪をゆるしてもらうのは、涇河の龍王、お前さんだろう。玉帝のおことばにそむいた罪で、龍の首を斬る死刑台のしたくは、もうちゃんとできているよ。」

ぴたり、言いあてられると、龍王は、からだじゅうの毛が、いちどにつんとつき立って、ひとつひとつの毛あなに、地獄の風が、ぞうっとつめたく吹きこむようにおもいました。

「先生、ごめんください。どうしたら、重い罪がゆりるでしょう。」

「それはわたしの力ぐらいで、いまさらどうにもなるものでない。お前さんのしおきは、あす午時半すぎておこなわれることになっている。その時刻になると魏徵の大臣が、天宮の役人にかわって、お前さんの首を斬ることになっている。いのちをたすかろうとおもうなら、その前、皇帝へいかにお目にかかって、願ってみたらいいでしょう。」

龍王は、たびたび礼をして、目に涙をためながら、來たときのいきおいはどこへやら、しおしおとかえって行きました。そとは、いつか夕日がしずんで、うすい三日月が光っていました。

龍王は、それなり水の住居にはかえらず、空の上にとどまって、宵のふけるのを待っていました。やがて、太宗皇帝が、お寢間に入り、夢をむすばれる時刻になりますと、龍王は、御苑のなかに、そっとはいりこみました。そこへ皇帝は、夢で庭にお出ましになって、花の陰をふんであるいてこられます。龍王は、その袖をひいて、かなしい声で、

「へいか、おたすけください。おたすけください。」

といって、たびたびおじぎしました。

皇帝ははじめ、なんのこととも分かりませんでしたが、大臣の魏徵が、天宮の役人にかわって、龍王の首を斬る役をいいつかっているしだいをきくと、

「よしよし、魏徵はわたしのけらいだ。たのんで、一命はとりとめてあげる。安心せよ。」

こういわれたので、龍王は、よろこんでかえって行きました。

さて、そのあくる日、目がさめてのちも、太宗は、まざまざ、ゆうべの夢をおぼえていました。ふしぎにおもいながら、やがて朝廷に出て、群臣一同のあいさつをうけましたが、そのなかに、ただひとり魏徵大臣の姿が見えません。そこで、ほかの老臣たちに、これこれこういうことがあったといって、ゆうべの夢の話をしますと、

「それは、かならずそのとおりのことがあるのでございましょう。午時半すぎのその時刻に、魏徵がそとへ出ませんよう、へいかのおそばに引きとめておおきになりましたら、かれも手がくだせず、龍王とのお約束をはたすことができましょう。」といいました。

皇帝は、この忠言をよろこばれて、すぐさま、魏徵の大臣を、宮中にお召しになりました。

魏徵の大臣夢に龍王を斬る話

ところで、こちらでも、魏徵の大臣は、前の晩夢うつつともなく、天宮から鶴にのった仙使が下って、明日午時半、夢で涇河の龍王を斬るようにという、玉帝のおことばをいただいたので、この朝は、わざと参朝もしず、劔のくもりをはらい、からだを清めて、ひと間にこもったまま、しずかに香をくゆらして、その時刻のくるのを待っていました。ところが、きゅうにへいかのお召だというので、しかたなく、朝廷に上がってみますと、へいかは、群臣たちのさがって行ったあとに、魏徵ひとりをおそばにおとどめになり、いろいろと、きみつの政治の話のあったあとで、

「大臣、一番たたかおう。」といって、碁盤を出しました。魏徵は、氣が氣ではありませんが、おあいてをして、一局まだすまないうち、午時ちかくなりました。すると、うつらうつらしてきて、どうにもがまんがならなくなりました。そのうち、がくりとうなだれて、そこに突っぷしたまま、ぐうぐう高いびきをかきだしたのでございます。太宗は、にっこり、このようすをみながら、

「國のため民のため、日夜心労の多い大臣のことだ。むりもない。」といって、そのまましずかに寝かしておおきになりました。

しばらくして、魏徵はふと目をさましますと、皇帝の御前なので、びっくりしました。それで、面目なさそうに、失礼の罪をわびました。でも、皇帝は、こころよさそうにわらって、

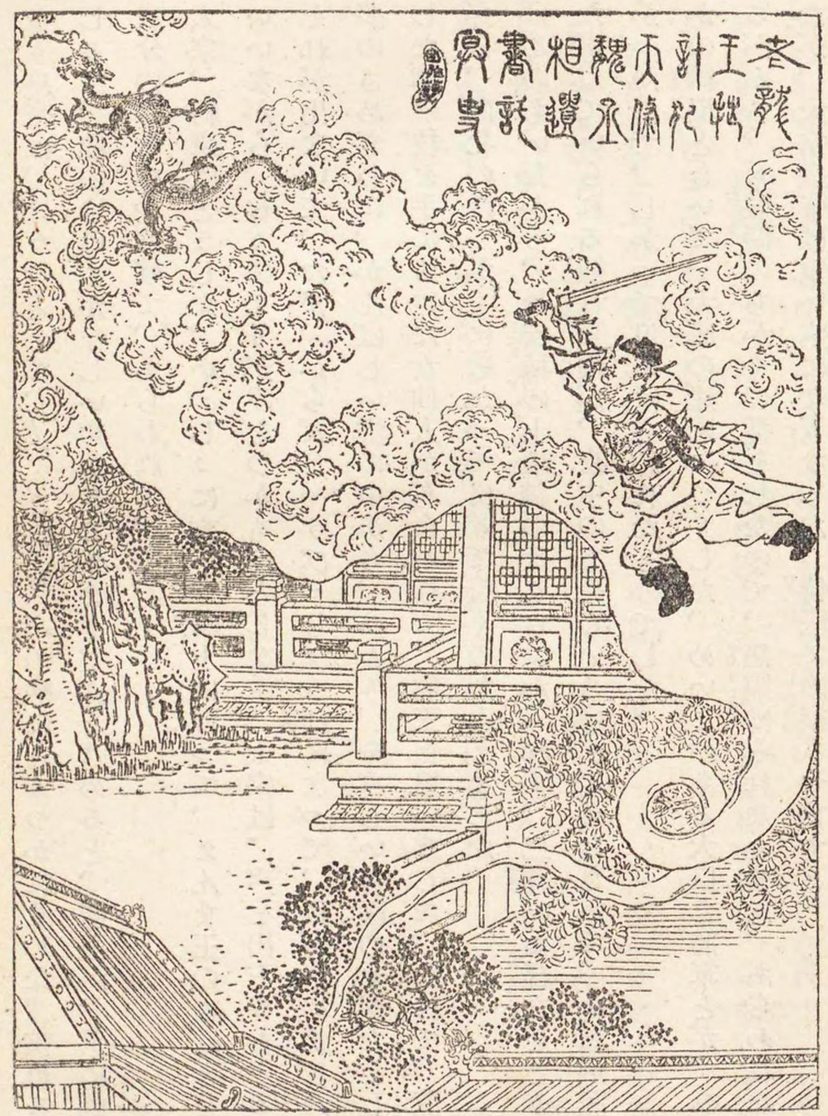
「かまわない。あらためて、もう一局行こう。」と、碁盤の前に膝をすすめられるとたん、お庭で、おおぜい侍臣たちの声がして、血のしたたる老龍の首をさげてもってきました。そうして、

「たった今、空の上から、このようなものが落ちてまいりました。」というのです。

魏徵は、夢の中で、まさしく一劔をふるって、みごとに龍王の首を断ったのでございます。

太宗は、そのとき心のなかで、

（われに、この豪傑の大臣あり、唐の天下はいよいよ安泰である）とおもって、よろこびましたが、さて、いったん龍王とつがえた助命の約束をかんがえますと、心が安まりません。



それなり皇帝は、ぼうッとして、うつらうつら、心の病にとりつかれました。夜ねると、しゅうしゅう、龍のさけぶかなしい声がきこえます。ふとさめると、龍王が、手に血のしたたる自分の首をひっさげて、あらわれて、

「唐の太宗、約束はどうした。いっしょに來い、冥土に行って、えんま王のさばきをうけよ。」といいながら、むりにえりがみをつかもうとします。太宗は、声を出そうとするのですが、それが出ないで、ただ、からだじゅうびっしょり汗になって、目がさめました。

その夢のさめぎわに、かんばしい雲の中から、ひとり、やさしい菩薩のすがたをして、青あおした柳の枝を手にもった女仙人があらわれて、龍王を追いました。それで、龍王が泣きながら、西北のほうがくにむかってにげて行くのがみえました。

これはこのあいだから、長安城の土地神のほこらにかくれて、三藏のお経文をとりに行く僧をたずねていられる観音菩薩が、夜中のあやしいさけびごえをきいて、それが龍の怨霊とわかったので、しかって追いはらわれたものでした。

へいかの御悩ときいて、大唐の建國につくした、めいよのある大臣と將軍とが、ひるよるかわるがわる、お寢間のちかくで番をしたので、怨霊はそれなりまた、あらわれなくなりましたが、太宗皇帝は重い病になりました。侍医に診察させますと、

「へいかのおいのちは、七日のうちにちぢまりました。」というのです。それで、いやおうなし、いよいよご臨終ときまったとき、魏徵は、そっと、皇帝のお袖に、一封の手紙を入れて、耳もとでこうささやきました。

「先年、わたくしと兄弟の誓いをいたしました崔珏がなくなって、ただいま冥土の判官役をつとめております。かれにあてて、へいかのみ魂のまた、おかえりになれますようにたのみましたから、やがて、ふたたびお顔をおがめますことをぞんじます。」

太宗は、かすかにうなずいて、それなり、目をつぶりました。